永久の闇と朧月

Black Rabbit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
永久の闇と朧月

【Ｎコード】
Ｎ２８０６Ｚ

【作者名】
Ｂｌａｃｋ　Ｒａｂｂｉｔ

【あらすじ】
とある神と悪魔が一つの世界を滅ぼした。その数百年後、長閑で平凡な村に、一人の少年が生まれる。その少年は災厄と罵られ、両親に裏切られ、その末路が……「ゾンビだよ！生きてねぇけど文句あるか！？」
新たに加わった英雄の子供を弟子にし、昼の護衛を任せとりあえず頑張って生きてみる物語。

「師匠、とりあえず目的は復讐だったはずなんですけど…？」

この作品は不定期更新です。暇つぶしに読んでもらえると嬉しいです。

出来るだけ早く更新するので、どうぞよろしくお願いします。

プロローグ　～神と悪魔～（前書き）

前作の続きが全然思い浮かばず、気分転換に新しいのを書いたらなぜかスラスラ書けてしまったので、投稿したいと思います。

恐ろしく駄文ですが、暇つぶしにどうぞ。

プロローグ　～神と悪魔～

そこは全ての存在を超越した者のみが存(い)在ることの許される世界。
その名も神界(ムンドゥス・ディ)……。
そこには2人の男が対峙していた。
片方は苦しそうに顔を青くしている。もう片方は飄々(ひょうひょう)とした態度で
その苦しそうな顔をした男を見ている。
金髪の――――とてつもない美青年な――――苦しそうな顔をした男が、
重々しく口を開け言葉を紡ごうとする。しかし男の口からは声がな
かなか出ない。動きもどこかぎこちなく、まるで空から糸で吊るさ
れた操り人形(マリオネット)のようだ…。
やっと、といった風に金髪の青年が口を開き、もう片方の――――こ
れまたとてつもない美青年な――――黒髪の男に言った。

「……ごめん。――――――」

悲痛な表情でそう告げた青年に、黒髪の青年は

「いいさ。別に……でも、まさか俺とお前が殺しあうことになる
なんてな。ついさっきまでは考えてもなかったぜ？ククッ…」

そう言って、嗤(わら)う。笑うではなく、嗤う。確かに笑ってはいるが、
目は全く笑っていないからだ。その体から迸(ほとばし)る殺気は、まるでさっ
きまでの飄々とした態度が嘘のようだ。

「……ごめん。僕がもっとしっかりしていれば…こんなことにはならなかったはず、だ」

その言葉にまた金髪の青年は謝る。

しかし、黒髪の青年は

「だから良いって。どうせ今更だろ。まぁ、いつかはこうなるんだろうなぁ、とか思ってたし。別に予想外でもなんでもないさ…。……。……でも、恐らく俺の魂は呪われちまうんだろうな。クハハ……。」

そう言って、自嘲気味に笑い。天(そら)を仰ぐ。

天には無数の星が瞬いていた。この世界は人間が住む世界とは次元(ディスク)が違うが、それでも天には星がある。それは同じことだった。

金髪の青年はこの世界において最強の神だった。そして黒髪の青年はこの世界において最凶の悪魔だった。２人は親友だった。５０００年前に出会って、戦ってお互いを認め合った好敵手(ライバル)でもある。

その２人が今、一つの世界で、何一つ無い世界で…対峙している。

「……」

金髪の青年は黒髪の青年と同じように天を見上げる。

変わらず絶えず流れ星がたくさん流れていた。

「……はぁ。こうしてても仕方ない、か。さっさと終わらせようぜ。お前も……死ぬ、いや…消える覚悟は出来てるんだろ？」

黒髪の青年はそう金髪の青年に問いかける。

「……あぁ」

問われた青年は、短く答える。

「なら、おしゃべりもこの辺にしとこうぜ。これ以上話すと……お前を斬ることが出来なくなっちまいそうだからな…」

そう言って、またクハハと笑う。

今度は本当におかしそうに、まるでこれから殺し合いをするとは思えない青年の…普通の笑いだった。

「……世界が消える。僕達が争うことで」

しかし、金髪の青年は笑わない。

顔に悲痛な表情を貼り付けて、決して笑うことはない。

「そうだな。……最強神を殺したとなっちゃ俺の魂はとんでもない呪いをうけるだろうな…。来世の俺は苦労しそうだ……あ、そうだ。今のうちに贈り物(ギフト)を用意しておくか！」

しかし、そんな表情の神を無視して、悪魔は色々と構築を開始する。

神はそれを黙って見ていた。

「……終わった？」

やがて手を止めた黒髪の青年に金髪の少年は問いかける。

「…ん？あぁ、終わった。これで来世の俺も頑張ってくれるといいんだがね」

少し遠い目をしながら答える黒髪の青年。

「さてと、殺(や)り合おうか」

そう呟いた悪魔から凄まじい殺気が放たれる。
しかし、神は気にも止めない。手を無造作に振る。すると、そこから無数の電撃が生み出される。普段の神はそんな力は無かったはずだが、悪魔が贈り物を作成している間に力を溜めていたのだ。
悪魔はそれを全て叩き落とす……。
――――――――――――――――長い、長い戦(ころしあ)いが始まった。

もういつから戦っていたのか…。そんなことは全く分からなくなるくらい戦い続けた2人。それはもしかすれば、1分程かもしれないし、1時間程かも…もしかすれば1年程戦っていたかもしれない。
地形はガタガタに変形していた。
すでに体は両方ともボロボロで、それでも2人は全く衰えなかった。

「ク、ハハ！……」

黒髪の青年は、口の端から血を流しながらもニヤリと歪ませながら嗤った。

「……っ……」

対する金髪の青年の腹は真っ赤に染まっていた。
斬り裂いたのだ。悪魔が神を

「世界は、変わるぜ？これ、で下界のほうも、変わるだろうよ。……ま、人間共はバカ、だからなぁ。どうせ殺し、あったりするんだろ、俺とお前みたいに、な」

息を切らしながら、それでも言葉を紡ぐ悪魔。
やがて、2人の姿がぼうっと崩れてきた。これは悪魔の使った最凶の能力(ちから)。
使用者と対象者を確実に消し飛ばす技。空間さえもが歪み、これからこの世界がどうなるのか…なんてことは全くわからない。それでも黒髪の青年は使ったのだ。親友(とも)の呪いを止めるために

「……今まで楽しかったぜ。最ッ高にな！だから悔いは無ぇ…ただまぁ、来世のヤツには申し訳ないが…こればっかりはどうしようもなかったしな……。」

黒髪の青年は消え行く体を見つめながら、目の前にいる金髪の青年に呟いた。

「……っ……僕も、だよ。……本当に…本当に今まで楽しかった。……僕が呪いなんてかからなければ……！」

涙を流しながら、金髪の青年は拳を握り締め、俯(うつむ)きながら悔やむ。

「まぁ、そのことについては仕方ないだろ。さて、もう時間もない。お互い消えるんだ…やっぱ最後は笑って悔いのないように消えないと」

「……そう、だね」

黒髪の青年が笑顔でそう言い、金髪の青年はうなずき、涙を拭く。

「じゃあな、今まで世話になったぜ。ありがとな、神様(しんゆう)」

「今までありがとう、きっとまた一緒に笑える日が来ると思うから…それまでさようなら。じゃあね悪魔(しんゆう)」

2人は最高の笑顔でそう言い放った。

「「世界は終わる。この一撃で」」

2人は同時に今までの最高出力を右腕に込め…全力で走り出す――――――――――――――――!!

その力がぶつかり合った瞬間、黒と白の衝撃波が世界を覆いつくし……世界は崩壊した。

プロローグ　～神と悪魔～（後書き）

とりあえずは、しばらくこっちの小説を更新していきたいと思います。
…とは言っても、前作をやめるわけではないので、そちらもよろしくお願いします。

もちろんこちらもよろしくお願いします。
誤字等ございましたらお気軽にご報告を

感想、評価、お待ちしております

異常な俺は粗末な扱い（前書き）

とりあえずここから物語スタートって感じですね

プロローグはまだあまり関係ないような感じだと思います。

今日中に2話投稿しますので、駄文ですがよろしくお願いします。

異常な俺は粗末な扱い

この世界……かつて最強の神と最凶の悪魔が滅び、何の変哲もない世界に魔術という存在が生まれた。
人類は理(ことわり)を覆す魔術という存在を研究し尽くした。しかし、分からないことが多すぎて実験を繰り返している状況だった。そう、だった。過去形なのだ。なぜなら……愚かな人類はその魔術という力を戦争に利用しようとしたのだ。
そしてそれに対抗するために、他の国もメキメキと魔術の力を伸ばしていき……戦争が終わったのは、人類がほぼ滅び、人口は１０００分の１にまで減り、人類の住める土地は４分の１になった後だった。その他は魔力による汚染で、瘴気が起こり、動物は魔獣へ、無機物は魔物へ、そして人類は亜人へと変化…いや、進化してしまう状況だ。瘴気に犯されたモノは一部を除き、凶暴化する。
だからこそ危険地区とされている汚染された大地へは誰も入ることはないのだ。
人間は魔術という力で、危険生物と戦うので精一杯の世界へと変化してしまったのだった。

それから何百年経った世界にて――――――物語は再び動き出そうとしていた…。

長閑(のどか)な感じのする村。
ちょっと魔術師が多いだけ――――とは言っても3人しかいない――――の何の変哲もない村。
そこが俺、影月(かげつき)　朧(おぼろ)の生まれた村だ。
そして、俺が今いる場所は…真っ暗な場所、固くて冷たい地面、そして目の前の鉄格子…。
まぁそこまで言えば誰だってわかるだろうが、答えは牢屋だ。
しかも地下牢。
ここに入れられたのは…確か4年程前だったと思う。
なんでも黒髪を持った俺は『災厄』の象徴なんだとさ、そんだけで俺をここに閉じ込めてるわけ…でもなさそうだ。
むしろ黒髪よりもヤバいモノを俺は持ってる。それは……魔眼だ。
俺の右目には魔眼があるのだ。しかし、この目は色々と危険なので、包帯と長く伸ばした前髪で隠している。

「……そういや俺って色々とおかしかったよなぁ」

そう、今思えば俺は色々と規格外だった。
現在の年齢は9歳だが、他の子供(ガキ)とは違う。と自分でも感じていた。
なぜなら、俺の自我は生まれた瞬間から存在していたから…。まるで、知らない赤子に『自分』という存在がとり憑いたような感覚だ。
しかも、知識面の記憶ならなぜかたくさん持っている。…なぜこんなにおかしな思考をしているのかは全くわからない。人間の汚いところをずっと見てきたからだろうか…？

「あ、お兄ちゃ～ん。ご飯持ってきたよ～」

「んぉ？」

そんな思考にハマっていたら、鉄格子の向こう側から聞こえたのほほ～んとした声。

顔を向けると、そこにはなんとも可愛らしい少女がいるではないかまぁ、俺の妹だけどさ…。茶髪の長い髪を左右の中央でまとめ、両肩に掛かる長さまで垂らした髪型…つまりはツインテール。そして、金色の瞳を持っている可愛い系の美少女だ。血が繋がってるとは到底思えない…。

「おぉ、明日香（あすか）。いつもありがとな」

俺が日頃の感謝を述べると、明日香はいつも通りの笑顔を見せて

「いいよ。だって家族じゃない」

と言った。まだ7歳のはずなのに…俺みたいにおかしいはずじゃないのに…なぜこんなに賢いのか…。だいたい俺のことを家族と言ってくれるヤツはこの世界でお前だけだよ……。

「全くもって出来た子だな」

そう言って、俺は明日香に近づこうとする…。しかし……

バチッ！！という音で見えない壁のようなモノに弾かれた。

明日香の悲鳴が上がるが、無視して前に進む。その瞬間……

「クズがッ！汚らわしい手でその娘（こ）に触れるな！」

鉄格子に手をかけた瞬間、誰かにその手を蹴り飛ばされ、後ろに倒

れこむ俺。
その姿に、明日香の悲鳴がもう一度響き…
「やめてください！あの人は私の兄なんですよ！？」
と声を荒げた。しかし、明日香の近くにいるであろう男は動じず
「しかしヤツは罪人です。本来なら貴女がここに来ることなど出来ないのです。ヤツが何をするのか分かりませんので、近づくことは許されません」
と正論をぶちかましやがった。
「……お兄ちゃん……」
辛そうに俯く明日香。というよりは辛いのだろう。俺の魔眼はウソを見抜く効果もあるのだ。
しかし、今までは何もしてこなかったが、やっぱり近づくとダメなわけか。
分かってたことだが、触れられないのは少し…辛いモノがある。
それにしても思いっきり蹴ってくれやがって、このクソ野郎……。
「クズはクズらしく家畜のエサでも食ってろ」
ムカツク男はそう言い捨てると、明日香を連れて牢屋を出て行ってしまう。
「……ぐすっ……ま、また来るから……」
明日香もそう言って泣きながら出て行ってしまった。

他人の為に泣けるとは…なんとも良い娘(こ)だな……。

とたんに静まり返る地下牢。まぁ、普通は騒がしいはずがないのだが、俺はいそいそと飯に近寄り、本当に家畜のエサのようなモノを食べる。……まずい。相変わらず…しかしもう慣れたので問題ない。

食い終わると…

「……ふぅ」

今まで溜めていた息を全て吐き出し、深呼吸をする。相変わらずまずい空気だ。しかしそれも慣れた。俺は今、ある計画を立てている。自由の取得…。つまりはここからの脱出、逃亡だ。

慕ってくれている妹には申し訳ないが、１０歳の誕生日を迎えると同時にこの村を出よう。そう考えている。そのための力はすでに手に入れた。

さっきの見えない壁の対処法もすでに実践済みだ。

１０歳の誕生日を迎えるまで…後４日ある。

「とりあえず、それまでは練習かな」

何の？と聞かれたら普通に魔術の練習だ。としか答えられない。

それと…少しだけ『魔眼(デスピアーチオ)』を使いこなすための訓練だな。

よし、開始しようか。

呪われた大地(カーズド・ワールド)という呼び方が存在する危険地区にもっとも近いこの村で、呪(おぼろ)われた少年が計画を実行するまで――――後４日。

異常な俺は粗末な扱い（後書き）

誤字等ございましたらお気軽にご報告を

感想、評価、お待ちしております

異常な俺は盗賊と戦う（前書き）

前作が行き詰っている間に、割と書き溜めてしまっていた。（と言ってもそこまで多くないんですけど）ということなんで、最初のほうは割りと早い投稿だと思います。

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ

異常な俺は盗賊と戦う

あれから3日が経った。明日はついに脱出計画を実行する日だ。魔術の使い方も完璧だ。万が一でも脱出に失敗することはないだろう。

そうなったら暇になった…。ということでこの3日間の話でもするとしようかね。

ムカツク男に俺が蹴り飛ばされた日の次の日、明日香は言った通りにここに来た。

しかし後ろにはいつものようにあのクソ野郎がいて、俺をすごい睨みつけてる。

そのせいか明日香は大した話もせず、上に登っていってしまった。

「……筋トレでもするか」

ということで腕立て１０００回、腹筋２０００回、壁蹴り５００回と暇つぶしに筋トレをしていた。
そのおかげか、幼い俺の体は余分な脂肪は一切なく、引き締まった体付きになっている。
まぁ、やることがなかったから４年前から始めただけなんだけどね、魔術も同じ理由だ。
魔術については魔眼の『透視』を使い、暇つぶしに村長の家にあった何百もの本を読んでいたら魔術という存在を知っただけだ。
しかし魔眼を使うと、莫大な魔力を消費する。魔術を知った今だから言えるが、この魔眼の使用時に使う魔力は最低でも上級魔術１０発分だ。上級魔術というのは、使用するための魔力が凄まじすぎて、１人１発使えるヤツがいるかどうか。といったところだ。
……俺がどれだけ異常なのかが良く分かったと思うが、それはまたの話にする。
その日はその後魔術の訓練をして、そのまま寝た。

その次の日もそのまた次の日もほとんど変わらない日常をすごしていった。
残念ながら明日香との雰囲気が未だに直っていないのは残念だ。
結局、もう少しで村出る予定だしなぁ…。とか思った。

そして今に至る。

「つか雰囲気悪いまま出てったほうがいいんじゃね？そのほうが簡単に忘れられるだろうし」

という考えに至った。よし、冷たく反応しておくとしようかな。アイツが俺のことなんて忘れて幸せに過ごしてくれるとうれしいね。…まぁ、ちょっと悲しくもある。兄として、な…。
今日も明日香がやってきた。やっぱり雰囲気は変わらず、このまま脱出まで上手くいけばいいなぁ…なんて思った俺がバカだった。だってそんなことを思ったら、何か起こることは確実だったのだ。

そろそろ出るか～日付の変更と同時にスタートするか、と思って準備をしていた時だった。
この村では、日が変わる時に教会の鐘が鳴る。だからそれを合図にして出て行こうと思っていたのだ。
しかし簡単にはいかないのが人生ってヤツだったみたいだ。
なんだか外が騒がしいなぁ…とか思っていると

「と、盗賊だぁぁぁぁぁ！ジーンさんがやられちまったぁぁぁぁぁぁぁ！！」

という大声が聞こえた。
ジーンというのは、この村に住んでいる実力がそこそこある魔術師だったはずだ。

「……」

やってられない…。なぜ、このタイミングで…と思っていたが、よくよく考えればチャンスだ。今のうちに外に出て、盗賊騒ぎの間に逃げ出せばいいや。などと考えていた時だった。

「きゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！」

悲鳴。そう悲鳴だ。しかし、どうでもいいのだ。ただの村人の悲鳴

なら、俺は全く気にしない。……でもアイツは違う。いつも俺を慕ってくれたし、きっとアイツがいなければ、俺はとっくの昔に狂っていただろう…。
その悲鳴は明日香のモノだった。
聞き間違えるはずもない。そんなことありえるはずがない。
だって毎日聞いていた声なのだから…誰も近づかないここに唯一来ようとする物好きの声なのだから…。

「……はぁ……行くしかねぇ、か」

なんだかんだでお人好しだな。俺って…今初めて知ったぜ。
この混乱で逃げちまえばいいのに…。そう思っている自分がいないこともなかったが、無理やり押さえつけて俺は右手を突き出す。
俺が右手に魔力をこめると、目の前に魔方陣が描かれる。

「……どっ、せい！」

俺は見えない壁に向かって魔術を発動する。もちろん無詠唱だ。本当は隠密のためだったんだが、今はそんなこと関係ないからな…。
発動させた魔術の名は『解呪（ディ・スペル）』。
こめた魔力の量よりも対象の魔術にこめられた魔力が少なければ、問答無用に打ち消してしまう強力な魔術だ。下級の魔術だが、俺はどの魔術よりも使えると思う。
解呪により、目の前の見えない壁が跡形もなく消え去る。

「……」

俺は走り出す。
目指すはクソッタレな盗賊だ。ムカツクしな、明日香に手をかけるとは…ぶち殺し確定だぜ。

俺は地下から村に繋がる道を駆け出した。

騒ぎの場所へたどり着くと、盗賊のリーダーっぽいヤツが明日香の腕を掴んでいる。
よく見ると、俺を蹴飛ばしたクソ野郎が近くで下っ端にボコボコにされたのか、顔を赤く腫れ上がらせ気絶していた。…もしかしたら死んでるかもしれないが、俺にとっちゃどうでもいい。気になるのは明日香だけだ。とりあえず俺のすべきことは魔術師が登場するまで時間を稼ぐ…またはその間に明日香を救出することだ。どっちにせよ…簡単だな。

「コイツ、売り飛ばしちまいましょう。これほどの上玉だ、高く売れますぜ」

「あぁ、そうだな。いや、その前に俺達で味見でもするか？くっくっく」

下卑た盗賊共の笑い声で、明日香は泣いていた。
味見って…意味は分かるが、コイツらは7歳児の子に一体何をしようというのだろうか…？
全くこれだからアホは困るぜ…。
ちょっとムカついて、俺は思いっきり地面を殴った。もちろん魔術込みで
次の瞬間、バガァンッ！という音を立てて地面が吹き飛んだ。

やりすぎた。なんて思ってないからな！……ウソだ。確実にやりすぎた。まさかこんなに脆いとは思わなかった。その勢いで包帯が吹き飛んじまったじゃねぇか…どんだけだ。

「な、なんだテメェは！」

盗賊の1人が俺に気付いたのか。声を張り上げて叫ぶ。

「……何って…災厄だよ」

俺が冗談半分にそういうと、盗賊共は顔を真っ青にさせ「か、髪が黒…。」「黒い髪…災厄」などと呟き始めた。
正直ちょっとショック。まさか盗賊にまで知られているとは思わなかった。
盗賊が知ってるってことは他のどこもそうなんだろうなぁ。と思い、ちょっとガックリ。これからはローブでも買う必要がありそうだ。

「くっ！所詮はガキ1人だ！ぶっ殺しちまえ！！」

リーダーは他の盗賊共にそう叫んだ。当然の如く下っ端共はこっちに向かって――――――来なかった。
なぜか？それは、俺が魔眼を発動させたからだ。
魔眼の力の1つ、『操作』。
俺は盗賊の下っ端の1人を操り、リーダーを真っ先に殺した。
そのせいか、他の盗賊はパニックに陥る。もちろんこれが狙いだ。
盗賊共がパニックに陥っている隙に、俺は明日香を抱(だ)えるようにして抱き上げ、走り出した。……遠くから魔術師――――俺の両親だが――――がやってくるのが見えた。
俺は明日香を下ろし、とりあえず盗賊をあの2人に任せて、逃げ出

すとするかな～なんて思っていた。だから気付くことが出来なかったのだ。
魔術師が打ち出した炎の龍は…盗賊ではなく俺に向かってきたということに……。
完全に油断していた。まさか俺に向かって打ってくるとは思わなかったからだ。明日香の顔も驚愕に満ちていた。しかし、もう時すでに遅し…炎の龍は目の前まで迫っていた。
本当に咄嗟に、無詠唱で障壁を作り出した。しかし、炎の龍の威力は即興の盾など軽々く突破し、俺の右手に被弾した。

「ぁぐ、！？ぎぃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

焼ける。腕が…生きたまま。
気が飛びそうな痛みをなんとか堪え、魔術で火を消し、全力で走り出す。
後ろから明日香の悲鳴が聞こえた。
しかし、それに構っているほどの余裕は、今の俺にはなかった。
必死で逃げ出し、近くの森に飛び込んだ。

真っ暗な森は傷ついた俺をあざ笑うかのようにザワめいていた。

異常な俺は盗賊と戦う（後書き）

誤字等ございましたらお気軽にご報告を

感想、評価、お待ちしております

異常な俺は死に絶える（前書き）

少し強引な展開だったような気がしますが、気にしません。ハイ

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ

異常な俺は死に絶える

「……っ……ぁあ、くっ…はぁはぁ。く、はは。やってくれるじゃねぇの。あのクソ親……」

俺は真っ暗な森の中で火の龍――――プロミネンスだっけ？――――を打ってきた母親に悪態をついていた。しかし、今考えてみればそうだ。俺は魔眼で盗賊を操りパニックに陥らせた。

恐らく向こうも俺が人を操る力を持っていることを知ったんだと思う。だから、狂ったアイツらの考えは、俺が盗賊を操り盗賊に村を襲わせたのではないか？という考えだったんだと思う。

本当、頭おかしい。そんなことをするくらいなら、村人を直に操ってるぜ。まぁ…後悔しても今更遅いけどな…ボヤいても仕方ないことだ。と思考を切り捨てた。その瞬間――――――――

「ッ！？…う、おぉ！？――――――――がはっ！」

足を滑らせ、ゴロゴロと山道を落ち、途中にあった木に激突したみたいだ。

背中に激痛が走る。肺の空気が全て外へ強制的に吐き出された。口の中を切ったのか、僅かに血が混ざった唾液を吐き捨てる。

「痛(つ)っ……クッソ……あの両親(クズども)のせいで、俺の計画が台無しだ！」

激痛を堪え、立ち上がった。
そして一番下までなんとか降りる。とりあえずどうしたもんか…右手はもうダメそうだから今のうちに斬りおとすか…？などと考えていると、左から恐ろしい速度で何かが飛んできた。
反射的に顔を右にズラしたが、避けきれずに頬が深く抉（えぐ）られた。だが体が麻痺しているのか、痛みはほぼと言って良いほど感じなかった。
何が…？と見てみると、それは――――

「………爪？」

そう、爪だ。クマの爪のような………

＜グギャアアアアアアアアアアアアアアア！！＞

そうそう。こんな感じの………

「ってデカすぎんだろ！つかなんでクマがここに！？」

と言ったはいいが、ここは森なんだから居てもおかしくないことに気付いた。
しかもコイツは見たことがある。確か村長の家にあった本に書いてあった魔獣だったと思う。
確か名前は…『マリッジベアー』だったと思う。危険度はなかなかに高いらしい。
こっちには武器もないし、もう少なくなった魔力は無駄遣いすることは許されない…つまりは――――

「素手で戦うか、一か八かで逃げるか………」

逃げるのは正直言って厳しい。怪我をしているこっちのが体力切れは早いだろうし、クマの走る速度は半端じゃない。しかも３ｍはある巨体だ。とても逃げられるとは思わない…。

「つまりは素手で戦(や)るしかないみたいだな」

勝てる道理は普通に考えてない。
魔術も武器もなしで魔獣に勝てるほど人類は強くない。

「でも…生きるためにはやるしかねぇだろうな」

いつか見てろ。必ずぶっ飛ばしてやるからなクソ親！と心の中で呟いて、クマに臨戦態勢に入る。
クマが飛び掛ってきたところを体を限界まで屈(かが)めてなんとかかわし、カウンターで腹を下から蹴り上げる。

＜ガ、ギャウゥ！！？＞

上に少し浮いたクマを勢いをつけた後ろ回し蹴りで思いっきり蹴り飛ばす。
バキッ！という音を立て、クマが吹き飛んでいく、が

「ぎっ…！？あ、ぐぁ……っ」

回し蹴りをした右足がへし折れた。さっきのバキッという音は、俺の足が折れた音らしい…。
クマが重すぎ＆硬すぎたのだ。右足に走る激痛を押し堪え、逃げようとする…が

＜グギャアアアアアアアアアアアアアア！！！！！＞

クマはその一撃でブチ切れたみたいで、今までよりも凄まじく早い突進を繰り出してきた。
そして、一瞬で目の前は真っ赤に染まった……。しかし、それは俺の血や殴られた衝撃とか、そういうものではなかった。
その赤は途轍(とてつ)もない熱を持っていた…つまりは、炎。いや、焔。
一体どこから…？と思ったが、その炎が消えた後にはクマは消し炭になっていて――――――

「……助かった…のか……？」

まだ油断は出来ない。だが、何者かの攻撃でクマは死んだのだ。
だから今が逃げるとき、あの両親があんな巨大な焔を撃てるとは思わないが、念のためだ。
しかし、俺は逃げられなかった。なぜなら……

＜グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！＞

巨大な咆哮が耳に痛いほど鳴り響く、その巨大な音に、思わず俺は耳を塞いだ。
そして咆哮の聞こえた上空へ目を向けると……

「……は？」

思わずそう言ってしまった。そして笑ってしまった。なぜなら、あの強力な焔も巨大な咆哮も…全てヤツがやったのだと分かったから…。
俺が見上げた上空には、５ｍ程の巨大な竜が羽ばたいていた。

「…………………っ………マジかよ」

状況は限りなく最悪に近い。
クソ…コイツに素手で勝つなんて…１００％無理だ。そして逃げることも１００％無理…。
つまり勝つには武器――それも魔剣や聖剣――を使うか、魔術――最上級魔術――を使うしかない。
しかし正直言って、最上級魔術を発動させても勝てる気がしない。
つまり勝つ方法は俺にはたった一つ。
それは……今ある全ての魔力を注ぎ込んで、魔眼を使うことだ。

「……どっちにしても死ぬかもな、でもまぁ…やらねぇよりはやったほうがいいだろ」

俺はそう言って、右目に魔力を注ぎ込む。最上級魔術５発分程の魔力を――魔眼、『死滅』に使う。そして、白目の部分が漆黒に染まり、魔眼が効果を発揮し始める。

「――――――――――――――っぁ…………！」

右目に激痛。左手で右目を抑える。しかし、痛みが引くことはない……。
だが、その痛みは確実に竜にダメージを与えていた。
<グギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！

！＞

悲痛な叫び声を上げ、上空をフラフラと浮遊し始める竜。
俺はそれを見て、勝った。そう思った。
だけど竜ってのはそんなに簡単に死んでくれるヤツじゃないらしい……。
竜が抵抗を開始した。ビタンビタンッ！と周りの森を尻尾で滅茶苦茶にし始めた。
そして、その尻尾がこっちに振られ――――――

「がっ！……――――――ご、ふっ」

まるでボールのように吹き飛んだ俺。
アバラが砕けたのが分かった。内蔵が潰れたのが分かった。口からは大量の鮮血が飛び散った。
ドゴッ、バスッ、ゴロゴロゴロ…ドンッ！バキバキ……
どこまで飛ばされたのかは分からない。とりあえず分かったことは、俺が竜の尻尾で吹き飛ばされ、後ろの木をへし折って止まった。ということだ。
今も竜は上空をのた打ち回っていた。そして、こっちに向かってくる。
尻尾がもう一度なぎ払われたが、今回はなんとか避けられた…。そう思った直後だった。

――――――――――――――――ガシュッ……

……？
最初は何が起こったのか分からなかった。しかし、視界が閉ざされているのが分かった。
しかも魔眼の右目じゃなく…左目が。

恐る恐る左目に触れる…いや、触れようとした。しかし、触れることが出来なかった。
なぜなら、俺の左目には、何かが刺さっていたからだ。
ブシュッと刺さっていたモノを抜いた。
それを魔眼の状態で見ると、竜の鱗であることが分かった。
恐らく、尻尾を振り回した時に剥がれて飛んできたのだろう…。全くついていない。
失血で意識が遠のく、魔眼の副作用で視界が闇に閉ざされた。

「……く……っそ……。死……ん……だか」

言葉にならない音を口から発し、俺の意識は途切れた。

異常な俺は死に絶える（後書き）

誤字脱字ございましたら、ご報告お願いします。

評価、感想、お待ちしております。

異常な俺は埋葬される（前書き）

今回は妹、明日香視点の話です

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ

私は信じられなかった。
3日前、お兄ちゃんは初めて私に触れようとした。でも、いつも地下牢の前にいる番人に阻まれてしまった。……私は知ってる、お兄ちゃんは何も悪いことなんてしてないってことを…。
でも誰一人お兄ちゃんに近づこうとしない…そう、お父さんとお母さんまで……。
あの時、お兄ちゃんが番人の人に蹴られたとき、私は気がつけば怒鳴っていた。でも、結局私は何も出来なかった。それが悔しくて、お兄ちゃんに向ける顔なんてないって思ってた。
でも、そのままじゃいけないって思って、今日お兄ちゃんに謝りに行こうと思っていた。そんな矢先――――盗賊が村を襲ってきたことが分かった。
村の人たちは皆、ジーンさんがやられたって言ってた。
ジーンさんはこの村の門番をしている人で、この村では私の両親を除く魔術師だった。そして両親と仲が良かったせいか、私もよく可愛がってもらっていた。
そんな人がやられた――――。それは少なからず私にショックを与えていたんだと思う。
でも、それよりもショックだったのは――――。
「クソッ！あの災厄のガキのせいか！？」

「そうに決まってる！クソ！あのガキ…さっさと殺せばよかったのに！」

そう言ってる村の皆だった。
災厄のガキ……言うまでもない、お兄ちゃんのことだ。
盗賊をお兄ちゃんがどうやってここに連れてくると言うのか…。自分達で地下牢（あそこ）に閉じ込めたくせに……。
私は行き場のない怒りを感じたが、今はそんなことに怒ってる場合じゃないのだ。それをどうにか押さえつけ、地下牢の入り口までついた……が。
ガシッと誰かに腕を掴まれた。

「ッ！？」

「おぉ！コイツは上玉じゃねぇか。まだガキだが…躾（しつ）けりゃいい女（ペット）になるんじゃねぇのか？」

「いいな、よし、ソイツ連れて来い」

「よっしゃー！とりあえず上玉は連れて来い。高く売れるからな！」

盗賊だった。
私は気がつけば捕まっていた。地下牢の門番の人は、もうボロボロで地面に転がっていた。
怖い…。そう思った。顎が震える。顔が真っ青になる。涙が滲む。

「い、いやぁ！離して！いやだ！怖いぃ！やめてぇ！！」

気がつけば私は叫んでいた。
しかし、盗賊達はその様子をニヤニヤと笑って見ているだけだった。

「誰か、誰かぁ！いやぁ…助けてぇ。やめっ……痛っ！」
パァン！と鋭い音が私の頬を打った。
一瞬何が起こったのか分からなかったが、痛みで我慢していた涙腺が崩壊し始める。
「ぅ……ぐすっ……いやぁ……ふぇぇぇぇぇぇ……」
「うるせぇぞ！静かにしろ！」
パァン！という音がもう一度鳴り響く。
頭がおかしくなりそうだった。なんで？どうして？私がこんな目にあってるの？
分からなかった。ただ…ただ、私はお兄ちゃんに謝りたかっただけなのに……。
「……助けて、お兄ちゃん」
私は小声で呟いた。でも、来るはずがない。お兄ちゃんはまだ、あの牢獄の中にいるのだから……。
もしかしたら、これが罰なのかもしれない。苦しんでいるお兄ちゃんに何もすることが出来なかった私への…。
そう考えたら、自然と恐怖心は薄れていった。どんどん思考が自虐的になっていく…。
バガァンッ！！
突然、凄まじい音が鳴り響いた。
盗賊達が動きを止める。

土煙が晴れたそこに立っていたのは……
病的に白い肌。顔の半分を覆い隠すほどの長い前髪、私と同じ金色の目…そして、どこか闇を連想させる漆黒の黒髪。
見間違えるはずもない、毎日ずっと会いに行っていた。
私の兄、影月　朧がそこに立っていた。

私は今見ている光景が信じられなかった。
なぜ、地下牢から出てこれたのか。なぜ、そんなに怒った顔をしているのか…。凍るように、でも血のように真っ赤なその右目は一体なんなのか…

「な、なんだテメェは！？」

沈黙に耐えられなくなったのか。１人の盗賊が叫んだ。
すると…

「……何って…災厄だよ」

そう言って、お兄ちゃんはニヤリと笑った。
その後、チラリとこっちを見て、声を出さずに呟いたような気がした。

「（そこで待ってろ。今すぐ助けてやる）」

もしかしたら聞き間違えかもしれない。
でも、やっぱり私を救ってくれるのはこの人なんだ。と、そう本気で思った。

「くっ！所詮はガキ１人だ！ぶっ殺しちまえ！」

リーダーみたいな男が叫んだ。
でも結果は私の予想を遥かに超えていた。
突然盗賊達が仲間割れし始めたのだ。……モフッ、という感触がいきなり当たったせいで、思わず「え？」と言ってしまった。
気がつけば、抱えられていたのだ。お兄ちゃんに…。

「お兄ちゃん！？」

「（もう少し経てば、魔術師２人が来るだろ。そこまで待っててくれ）」

優しく囁かれたその言葉に、私はうなずくことしか出来なかった。
あわてて顔を逸らした先に見えたのは２つの人影だった。
見ただけで分かった。あれは両親だ。
助かった…。私は完全にそう思っていた。でも、両親が打ち出した炎の龍のようなモノは――――――

「え！？」

――――――――――お兄ちゃんに直撃した。
私の頭にはいくつもの疑問符が浮かんでいる、なんで？どうして？そう思った。
それはお兄ちゃんも同じのようで、目を大きく見開いてお父さんとお母さんを見ていた。――――が、すぐに叫び声を上げて、村の外に走り出してしまった。
……信じられない。お兄ちゃんは私を助けただけだった。それなのに……。
私が呆然としているうちに盗賊は全員拘束されていた。

「だ、大丈夫！？どこにも怪我ない！？もう大丈夫だから、ね」

「このバカ！心配かけさせやがって！」

気がつけば、両親が私に抱きついていた。
でも今の私は空っぽだった。２人の言ってることが理解出来なかった。

なんで２人共お兄ちゃんに炎の龍を当てといて私の心配をしてるの…？
なんで誰も村の外に走っていったお兄ちゃんを追いかけないの…？
なんで私はこんなところで両親に抱きつかれているの…？

そんな暇はないはずだ。
気がつけば、私は２人を突き飛ばしていた。２人の顔が驚愕に歪む。

「なんで…なんでお兄ちゃんを誰も心配しないの！？なんで親子なのに魔術を――――――」

「違うわ！アレは人間じゃない。貴女に兄なんていない…。アレは化物よ」

「そうだ。アイツは化物…葬り去られなければならない災厄の遺物だ……」

違う。
お兄ちゃんは人間だ。少なくとも…地下牢に入れられて悲しみ、妹を盗賊に襲われて怒り、両親に魔術を打たれて絶望する…そんな人間だ。

「あの化物…呪われた大地のほうに走ってったぞ！」

「そうか…なら追いかける必要はないか。勝手にくたばるだろう」
その言葉を聞いた私は、気がつけば駆け出していた。向かうのはお兄ちゃんの向かった森…。
危険な魔獣や魔物が出るから近寄ってはいけないと言われていたこの森…。でも、今の私にそんなことは関係なかった。無我夢中で走る。後ろから誰かが追いかけてきてる気がしたけど、そんなことお構いなしで走り出した。
走っている途中、魔獣の咆哮が聞こえた。
お兄ちゃんだ。そう思って疑わなかった。私は音のしたほうに向かって走り出した――――――。

「……そ、んな」
私は信じられない光景を目にした。
もがき苦しみ、空中で暴れている巨大な龍。そして、その近くで血塗(まみ)れになり膝をついてるお兄ちゃんが私の視界には写っていた。
「きゃぁ！？」
私は悲鳴を上げた。なぜなら、私の近くに折れた木が飛んできたからだ。
龍は痛みで発狂し…滅茶苦茶に尻尾を振り回し始めたのだ。
それは周りの木々をなぎ倒し…強風を生み出し――――――その尻

尾はお兄ちゃんを直撃した。
私が悲鳴を上げる暇もなかった。
ベキュッという鈍い音が鳴り響き、轟音を立てて―――ボールのように―――吹き飛んでいった。そして、その後も龍は尻尾でお兄ちゃんの体を滅多打ちにして――――――――――――。
そして兄の体は、ピクリとも動かなくなってしまった。
その瞬間―――――――――――――

＜グォォアアアァァァァァァァァァァァァァァァァアアアアアアアアアア！！！！＞

龍は断末魔の叫びを上げて、地面に落ちた。
ズドォン！という凄まじい音を立てて落ちたソレは、生きてるのか死んでるのかは分からなかったが、とりあえず動かなくなったのは分かった。
私はお兄ちゃんが吹き飛んでいったところへ走った。
そこで見たのは………

「………うっ！？」

それを見た瞬間、思わず私は吐き出してしまった。胃の中のモノが全て無くなるまで………。
それほど、お兄ちゃんの体に起こっている状況はひどかった。
顔は何かに抉られたのか、左目の下から左耳の下まで大きく切り裂かれ、左目自体に何かが縦に突き刺さったような痕(あと)があり、そして体は、腸がはみ出て、その腸でさえズタズタに切り裂かれている。
右腕は、肩口からはキレイすっぱりなくなっていて…ところどころから肋骨か何かが砕けた状況で突き出ていた。左手を触ってみると…もうすでに凍りついた体温だった………。

「……ぁ」

死んだ。そう思った。
昨日…いや、今日の昼まで一緒にしゃべっていたのに…。
声にならない。涙腺が緩み、涙が零(こぼ)れ落ちた。私は理解出来なかった。
なぜこんなことになってるのだろうか…。自分の無力をこれほど呪った日はなかった。

「どう、えぐっ…し、て……ひっく、ぅ…なんで……ぐすっ」

ポタポタと私の目から零れ落ちた透明な雫は…傷のついた少年の頬に落ちる。
その瞬間…日付が変わる教会の鐘がなった。
そして思い出す。今日は6月6日…お兄ちゃんの誕生日だ。
私は瞳から零れ落ちる雫を堪えることが出来なかった。お兄ちゃんの胸にもたれかかり、声を出して泣いた。

どれくらい泣いていただろうか。涙は枯れ果て、悲しみも幾分かマシになった。
この声で魔獣が寄ってきたとしても…別に構わない、と私はそう思った。

「お墓…立ててあげるから」

私が立てなければ、お兄ちゃんという存在は誰の心にも残ってくれないだろう。
だから、ここに私は墓を立てる。

一心不乱に私は…墓穴を掘り続けた。爪が割れても、捲(めく)れても、気にしないで彫り続けた…。

夜空には綺麗な満月が煌(きらめ)いていた。

異常な俺は埋葬される（後書き）

ということで、やっと主人公が死ぬまでの話を全部書けました。

誤字脱字ございましたら、どうぞ気軽にご報告よろしくお願いします。

感想、評価、お気に入り、お待ちしております＾＾

異常な俺は蘇る（前書き）

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ^^

異常な俺は蘇る

「…はぁ、はぁ、はぁ…っ！」

私は走り続けていた。
暗い森の中を…何が何でも死ぬわけにはいかなかったから…。
この子を死なせるわけにはいかないから！
私と…あの人の間に生まれた子供。絶対に死なせるわけにはいかない。

「はっ、はっ、はぁっ……きゃ！」

ドスン！
足元にあった何かで躓いたらしい…。それでも止まるわけにはいかない。
絶対に――――――

「…はぁ、はぁ、はぁ……逃げ…、きった……？」

気がつけば、後ろには誰もいなかった。
でも無我夢中で逃げてきたからか、ここがどこなのか…全く分からなかった。
分からなかったが、とりあえず守ることは出来た。私、木桜（きざくら）　奈央（なお）と…英雄、真（まこと）の子供、光（あきら）を。

「……痛っ！」

安心したら、足の傷が痛みを増してきた。
裸足で走り続けたせいで、ところどころ切り傷があり、場所によっては穴が開いてる場所もあった。
痛みが増してきた足を引きずりながら、丁度いい高さにあった石（岩？）を掴んで、その場に座り込む。消毒がしたかったのだが、水もないし薬草もない。
なので我慢しなければ…。
しかし、痛いモノは痛いし、人間なんだからお腹が減ってきた。
光はまだスヤスヤと寝ているが、起きた時に大泣きすることは確実だろう。そのためにはご飯が必要なのだが……。

「……暗くてよく分からないですね」

とりあえずは眠ることにした。
しかし気付いてしまった。私が寄りかかっているのは…パッと見、墓だった。
つまりこの苔むした石は…墓石……？
でもこんなところで死ぬ人に墓を作る人なんて……。
そんなことを考えていると……

「オギャアアアアア！オギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

「ッ！？」

光が夜泣きを開始した。
びっくりした…。そう思いながら、私は光を宥（なだ）める。
ようやく落ち着いた…。そう思ったのも束の間…。

ウウォォォォォォォン……

という音が後ろから聞こえてきた。
恐る恐るそちらを見ると、暗い森の中で、ギンギンに光る赤い目を発見した。
恐らくオオカミだろうと思い、追い払おうとした。
しかし……

＜ククク…ウマソウナ、ニンゲン、ダ＞

＜ヤワラカ、ソウナ、ニク、ダ、＞

＜コロシテ、クウ、ト、シヨウ＞

片言ながら喋りだすオオカミたち。
そこでやっと気付いた。この森の魔力の流れが異常だということ…
ここが呪われた大地（カーズド・ワールド）だということに……。
殺される…私はそう思った。呪われた大地は魔獣や魔物が永遠（とわ）に生産される。そして、その魔獣や魔物はどれも人間が住んでいるところに出てくるモノよりも凄まじく強力なのだ。
身を竦ませて震えることしか出来なかった私に、オオカミたちは容赦なく襲いかかってきた。
しかしその瞬間――――――――

＜ギュ！？ガギャアアアアアアア！？＞

飛び掛ってきたオオカミ3匹が急に空中で動きを止めた。
本当に急だった。私はなぜオオカミたちが空中で止まったのか…いや、なぜオオカミが宙に浮くことが出来るのかが謎だった。
しかし、近づいてみて分かった。

オオカミたちは、地面から伸びた黒いモノに突き刺されていた。

グボッ……。

急に地面が盛り上がる…私は驚きで体が動かなかった。
地面から出てきたのは…病的な白い肌に、黒みがかった白い髪が特徴的な１０歳くらいの少年だった。
髪の毛は地面につくんじゃないだろうか？というくらい長い。
正直に言えば、私は見惚れていたのだ。地面から出てきた…私の命を救ってくれた少年に………。
少年はゆっくりとこちらを振り返り――――――――――――――――――――

■□■□■□■□■□■□■□■
□■□■□

俺は、夢を見ていた。

「よぅ、起きたか？」

目の前には…『俺』がいた。
つやのある漆黒の髪、右目の魔眼、左目の金色の瞳…間違うはずもない、『俺』だった。

「ははは、混乱すんのも無理はねぇな。まぁ、安心しろ。俺はお前の敵じゃないし…つか、お前自身って言ってもおかしくない…。む

しろ俺が本体(オリジナル)でお前は劣化品(レプリカ)なんだけどな」

――――――……俺が…お前の劣化品だと？

「あぁ。まぁ、おかしいとは思ってただろ？生まれたときから意識があり、災厄と罵られ…結局は死んだ…。そんな散々な人生なのさ。呪われた俺達の運命なんてのはな」

――――――……。

「でも安心しろ。俺はすでに終わったからな、これからはお前の時代なんだ。だから最後に、お前に本体(オリジナル)の力を渡しに来た」

――――――本体の…力、だと？

「そ、お前がそんな苦労する人生を送ったのは…ま、俺が原因なんだわ。ちょっとしたことで魂を呪われちゃってね。まぁ心配すんな、俺がお前を再構築(リメイク)してやるよ。もう体は死んだみたいだからな……弄(いじ)るにはもってこいだ」

――――――……。

「大丈夫さ。心配はいらねぇよ、悪いようにはしねぇ。そんでもって、今魂とのズレを直した。どうだ？気分は…？」

――――――……悪くない。いや、なんだかパズルがピッタリハマったみたいな感覚だ。

「よしよし、それのおかげで今まで使えなかった魔術も簡単に構成出来るだろうよ。そんで筋肉とかも…よし、完成。これで俺とほぼ

同じ姿だな。そんで今こそ贈り物(ギフト)を送るときだな」

――――――贈り物？

「そそ、贈り物は3つあるんだわ。まず1つ目が、俺の力…『不死身』だな」

――――――不死身？

「おぅ、死ななくなる。老けもしない。不変ってヤツさ。何も変わらない…ま、実際は色々と変わるけどな…。」

――――――滅茶苦茶だろ……。

「まぁ気にすんな。そんで2つ目は【――――――】だ」

――――――……？なんだ？今なんて…

「聞き取れないか。まだお前には早いってことだな」

――――――……おい、使えるモン寄こせよ…。

「ま、いつかは使えるから大丈夫だ。さて、最後は…【？？？】だな」

――――――……。……。……。

「この能力は異常だ。でも弱点はある…それはな、日、火、灯だ」

――――――…完全夜行性かよ。というより、また聞き取れなかった

んだが…

「そうだな。夜行性というか、夜じゃないと何も出来ないと思うぜ？」

――――……無視か…。

「くくっ…ま、頑張れや。俺の出番はもう終了だ。死んだお前を復活させるのが本当の贈り物だったんだがな、割と時間があったからちょいと遊んじまった…そういや、ここは時空がおかしくなってるから…早く戻らないと困った状況になるかもしれんな」

――――それを先に言え。……じゃあな、なんだかんだで蘇らせてくれてありがとな。

「いいって…元は俺のせいだし。向こうで会う元神様にもよろしくな」

――――……？……元神様？

「『閉じろ』」

――――お、おい。ちょっと待て元神様って――――――――――――。

ガチャリ

扉が閉じた。

そこにはすでに俺の姿は見えない。

だからこそ、アイツが消えてから…ポツリと呟く。

「強くなれよ。これからお前はすげぇ苦労をするだろうからな。決して負けないように、強くなれ。もう一度出会うまで、何人（なんびと）にも敗（ま）けぬような勝者になれ」

■□■□■□■□■□■□■
□■□■□

扉が閉じた。
もう『俺』の姿は見えない。
気がつけば目の前が真っ暗だ。ここどこだ？体が動かない…わけじゃないが、なんだか重い…。
……感触的に土みたいだ。
埋まってるのか？俺……………まぁいいか。さっさと出るとしよう。
魔術『影（ドッペル）』を発動。………すげぇ。生前の１０００倍はあるだろう絶対的な魔力だ。

思いっきり上に腕を振り上げた。
ガシュっという音が響いた。何だ？と思いながら土から這い出る。
すると、オオカミがバラバラになって倒れていて……そして、こっちを見て驚愕している、ボロボロの服を着た美人のお姉さんと眠っている赤子がいた。

「…………」

なんだか、口を開く気が出ない。
無気力。これが復活した代償かもしれないと、その時思った。

そして、黒かった髪が灰色のような白になっていた。生前の傷も全部残ってるみたいだ。
なんだか……感情が消えたみたいだな。驚きも悲しみも怒りも…何も感じない。

「……あ、あの……」

俺がお姉さんのほうをずっと見ていると、お姉さんのほうが話しかけてきた。

「な、なんで……土から？」

「……」

さて、なんと答えよう。

選択肢１：蘇ったんだ。……正気を疑われるな
選択肢２：土が好きなんだ。……こっちだってなかなかに頭おかしい
選択肢３：寝てたら埋まってた。……どうしてこうなった

もういいや、無視しよ。答えるのも億劫だ。……ん、今日は満月か

「……？」

お姉さんは俺が空を仰いだのを見て、つられて空を見上げる。

「わぁぁ……満月……綺麗ですね」

「……」

お姉さんの言葉に、俺は無言で肯定を示す。

「あのぅ……ここで一体何をしてたんですか…？」

黙っている俺に向かって再び質問してきたお姉さん。

「……住んでた」

とりあえずウソを言っておく

「ッ！？……住んでるんですか！？この危険地域に！！？」

「……あぁ」

大げさに驚くお姉さんに頷いて答える。

「……あの、お願いがあるんですけど……」

オズオズ…といったようすで聞いてくるお姉さん。

「……？」

「私とこの子も…一緒に住まわせてもらえないでしょうか？」

……予想外事態発生。どうしたものか…ウソで言ったのに本気にしてくれやがった上、一緒に住みませんか？って……ちょっと警戒が足りないような気もするが…。

「……別にいいか」

まぁ、問題ないや。とりあえず、色々と聞きたいことがあるしね…。今がいつなのかさえ、今の俺には分からんから…。とりあえず分かってることは、龍との戦闘の痕がなくなるくらいの年月は経ってるってことだ…。まぁ、今なら分かるけど、ここは呪われた大地って呼ばれてたとこだったのか。魔力の流れがちょっと異常だ。

これからのことを考えると、憂鬱になってくる。

結局妹はどうしてるんだろうな～等と考えていると、自然とため息が出た。

異常な俺は蘇る（後書き）

駄文ですが、これからもよろしくお願いします。
誤字等ございましたらお気軽にご報告を

感想、評価、お待ちしております

異常な俺は敗北を知る（前書き）

駄文です。今回は一番迷いに迷って書いた…気がする話でした。

本当に駄文ですが、暇つぶしにどうぞ＾＾

異常な俺は敗北を知る

あれから、色々とお姉さんに聞くことが出来た。
今は、自分が死んでから１０年経った世界だということ、実年齢でいくと俺のほうがお姉さんよりも年上なこと、名前は木桜（きざくら）　奈央（なお）ということ、英雄の番（つがい）で、赤子のほうは光（あきら）という名前だということ、この近くには…もう村はないということ。
非常に為になった。しかし１０年間の空白（ブランク）は大きく、なかなかにズレを感じるかな？などと考えていたが、魔獣や魔物が少し強くなった程度（普通の人には程度ではすまないのだが…）だったので、特に問題はなかった。
実際住んでるといったモノの、そんなモノはウソなので、適当にボロクソな洞窟を見つけて、その中でとりあえず生きることにした。
こんな所に一緒に住みたがるなんて、なんだか事情がありそうだが、どうでもいいので、スルーすることにする。
容姿は…色々と変わっていた。
まず、顔に傷が多い。左目の下にある抉られた傷と竜の鱗が突き刺さった傷も健在だった。……あの時に傷が深かったモノは全て残ってるみたいだ、首の切り傷とか…腹の裂けたような傷痕…とかな。
そして、金色だった目はなぜか黒くなっていて、中心に小さく金色の瞳が残っているだけだった。
最後に…一番変わっていたのは髪の毛、真っ黒だった髪の毛は灰色に限りなく近い白になっていた。しかも地面につくほど長いくせに、切っても切っても次の日には直るという変な状況に陥っていた。

見た目は死んだ時の約１０歳と変わっていなかった。
傷痕は目立つし気持ち悪いので、包帯を巻いている。とは言っても巻いているのは首と右目――魔眼だから包帯をしているだけで、怪我してるわけじゃない――だけだ。まぁどうでもいいことだ。ちなみに言っておくと、包帯はなぜか使えるようになった『錬金』という魔術を使って作り上げた。

さて、これからどうしようか…。

あれから早くも5年が経った。
というのもこの5年間、特に何もなかった。普通に魔獣を狩って喰らい、力をつけた。体は生前よりも強化されていたが、昼間には効果を全く発揮しなかった。
だがしかし、今日は違ったみたいだ。今、俺の目の前にいるのは…竜だった。真っ黒な竜――黒竜――とでも呼ぶか。
しかも、俺が生前戦ったヤツなんて、ひじきの生えた大根に見えるくらいの大きさと凶暴さを持った。

足が震えた。勝てるはずがないと本能で察してしまう程の力量差がそこにあった。
黒竜は言葉を話すことが出来た。伝えたいことは、＜女をよこせ＞ということだった。
女というのは間違いなく奈央のことだろう。そして奈央は今、俺の

後ろにいる。
光(あきら)は洞窟で寝ている。アイツは知的で…まるで俺みたいに生を授かった瞬(とき)間から意識があったのか？というくらいに出来た子供(ガキ)だからな…。あそこで起きて、1人になっていても問題ない…と思う。
そして、もう一つの懸念事項は……

「……暑い」

昼だということだ。
基本俺は昼には洞窟から出ないで、奈央に色々と必要なモノを拾いに行って貰っていたのだが…。
奈央の悲鳴を聞いて駆けつけてきた結果がこれだ。
本当…どうしようもない。夜の俺なら、まだなんとか戦えそうだが、昼になったら戦闘力は0に近くなると思う。

「ぁ……朧、さん……」

怖いのは奈央も同じのようだ。
まぁ、よこせと言われているのだから、怖いのは当然か…と思った。
ただ呆然とそう思ったのだ。…もしかしたら、俺は今この現実から逃げ出そうとしているのかもしれない。

＜どけ、邪魔をするならば貴様を殺すぞ……＞

しかしドスの利いた声が、俺を現実へと引き戻す。
どうしようもない…そんな考えが頭をチラつき、額からは滝のように汗が流れてくる……。

「……っ……殺す」

強がって出た言葉がこれだった。
だが、その言葉に篭った力はあまりにも弱弱しいモノだった。
＜愚かな、死に逝くか…我には生娘の血肉が必要だ。その女を喰らえば…次の５０年後までは凌ぐことが出来る……＞
「……喰らうぞ、と言われて黙って喰われるほど…俺達は大人しくはないつもりだ」
俺にすれば…すごい長いセリフだったと思う。
疲れた。久しぶりに口動かしたわ。つかそもそも奈央は生娘じゃないような気がするんだが
＜……ならば、死ぬがいい＞
「お、朧さんっ！逃げましょう！こんなの……勝てるわけが――――――――っ！？」
「……殺す」
逃げ切れると思ってんなら、お前の頭はポンコツだ、奈央。
コイツは全長３０ｍは軽くある。そのくせ翼で空飛ぶし、炎弾（ブレス）もあるし…逃げられるわけがない。
今は昼だし、力は出ねぇ…体はダルい…。けどまぁ、やんなきゃダメみたいだから…本気でやる。
俺は全力で走り出した。

勝敗は見て明らかだった。
右腕は肩から無くなり、左足も膝から下がなくなった。
左のわき腹は炎弾により焼け落ち、尻尾で叩きのめされた顔はグシャグシャになった。
完敗だった。手も足も出ないとは、まさにこれのことだった。圧倒的な力量の差…一方的な虐殺（ワンサイド・ゲーム）と化した戦場。
不死身になってから、初めての敗北だった。魔眼の『死滅』さえ大したダメージを与えることは出来なかった。
炎と光は弱点なのだ…。だからもう蘇生さえも遅くなってきている。ズタズタになり、俺を隠し切ることの出来なくなったフードのせいで、俺の頭は直射日光をうけている。
いろんな出来事が走馬灯のように流れ出て……俺は意識を失った。意識が飛ぶ寸前で聞こえた悲鳴は……恐らく奈央のだったんだろうな、なんてことをボンヤリと思った。

目が覚めた。欠陥していた四肢は全て、何事も無かったかのように復活していて、傷一つない状況だった。
そこは間違いなく俺が黒竜に一方的に虐殺された場所だった。近くには誰の姿もない…黒竜も、もちろん奈央の姿も……。
日は沈んでいた。夜空には三日月が煌いていた。
終わったのだ。俺の意識が飛んでいる間に……全てが

「……負けた」

なんだか頭がボーッとする。何も考えられない。今日の出来事が全て夢のような気がする。
一体俺は何をしてるんだろうか、一体何のために生きてるのだろうか、一体なぜ…奈央を奪われてこんなにも平然としてられるのだろうか…。
…あぁ、そうか。俺、死んだから別になんとも思わないのか。

「……くっそ…。」

体が震えた。怖い…。自分の心が、化物のようになってしまったみたいで…。
そんな自分にイラついた。ムカついた。気持ち悪いとさえ思った。
だが、思ってしまう。俺は実は本当の化物なんじゃないか…？って……。

「……強くなる、絶対」

そんなことを言ってなきゃやってられなくなって…。ついついそんな言葉を言ってしまった。
でも、今思えばその通りなのかもしれない。
この先、強くならなければ生き残れないみたいだ。体だけじゃなく…心も。
奈央という存在を失って気付いた。……いや、気付かないフリをしてたが、本当は蘇ったあの時から不安で一杯だった。
俺という存在はどうせその程度の強さなのだ。だからこそ強くならなければならない。
俺を殺したヤツらに復讐するためにも……。

しかし強くなるには、まずは何をすればいいのか？
……分からない。が、分からないならば分からないなりになんとかするしかない。

「……とりあえずは帰るか」

さて、光には一体なんて説明するか…。なんて自嘲気味に笑いながら

異常な俺は敗北を知る（後書き）

実際三人称と一人称ではどっちが書きやすいんでしょう？とふと疑問に思った作者でした。……実に関係ありませんでしたね、すいません

誤字脱字のご報告、お気軽にどうぞ

感想、評価、お気に入り、なんでも募集中です！＾＾

異常な俺は人里へ行く（前書き）

進みに進む時系列……

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ＾＾

異常な俺は人里へ行く

あれからさらに１０年が経った。
光には、もう5年前にすでに全てを話してある。…あの日、黒竜が現れ、奈央が喰われたことを。
本当に喰われたという証拠はないが、あの黒竜の発言からして…ほぼありえないだろう……。
光は「……そうですか」と一言呟いただけだった。
まるで、分かってました。といったように…まぁ確かにイヤでも分かるだろうけど
俺が「……俺を恨んでないのか？」と聞いたら、

「お母様が死んだのは師匠のせいじゃありませんよ。全て…無力だった僕が悪いんです」

そういって俯いていた。６年前程から俺は光に『師匠』と呼ばれていた。
魔眼を持つ俺なら分かる、本気でコイツが悔やんでいるということを…。

「僕は強くなりたい。守りたいモノを守る力が欲しいんです。師匠、僕をもっと強くしてください」

と言って頭を下げてきたのは記憶に新しい。

「僕は昼(ひかり)で師匠を全力で守ります。だから師匠は夜(やみ)を支配して…存分に暴れてください」

そう言ってきたのも、気がつけば5年前かもしれない。
俺がその時どう返事をしたのかは覚えていない。
でも、肯定の意を示したのは確かだ。

そんなこんなで気がつけば俺は実年齢３５（見た目は１０）歳、光は１５歳になっていた。
大分強くなった。常に実戦で戦い、その度に磨かれていく本能的強さ。
光はそれを全て自分の力にしていった。対する俺は、すでに恐怖という防衛本能は消えていたし、死にまくりだった。
光は最初こそは俺が殺されたところで泣きじゃくっていたが、すぐに復活したところを見て、最近じゃ呆れ顔か苦笑い（どっちも同じような感じ）をしている。それと、この１０年間でなんとか思ったとおり話すことが出来るようになった、夜だけだが…。
……そろそろ、か。

「……コウ」

「……光(あきら)ですよ。何度言えば分かるんですか、師匠」

コウというのは、光の呼び名だ。俺が勝手につけたあだ名。
最近は一応ツッコむものの、面倒になってきているらしく…適当に返してくる感じだった。
適当にやるくらいならツッコまなきゃいいのに…バカだなぁ、などと考えていても仕方が無いので、とりあえず心の中でコウをバカに

しながら俺は話を続ける。

「……そろそろ呪(ココ)われた大地を出るぞ」

「そうですか、やっとですか…。楽しみですね、人間ってどんな感じなんでしょうか」

「……少なくとも、俺の記憶に残ってるのはクズばっかだな」

俺を焼いた両親を思い出す。俺を蹴り飛ばしたクソ野郎を思い出す。その他の俺を閉じ込めたヤツらを思い出す。

本当にクソったれな連中ばっかだった。

でも、やっぱり希望は存在するものだ、なぜなら俺自身にも希望が存在していたのだから……。

あの少女に会わなくなってから20年が経ってるはずだ。

彼女は一体今、どこで、何をしているのだろうか…。

「……師匠？」

気がつけば、コウが俺の顔を覗き込むようにしゃがみながらこちらを見ていた。

物思いに耽(ふけ)っていたせいか、少しボーッとしていたようだ。

「……なんでもねぇ、早く準備しろ」

そう言ってコウの返事も聞かないまま、俺は風魔術の『浮遊』を使って空(ちゅう)に浮く。

そのまま遠くを見つめる。右目の魔眼に魔力をこめ、『遠視』を発動する。

遠くからは、人間が来ていた。

恐らくはこの土地――――呪われた大地――――の調査だろう。
やめておけばいいのに…。と俺は内心そう思った。
なぜなら、勝てるはずがないからだ。所詮人間が…ここに住む化物共に。

「……バカだな」

しかも…今は日も沈んだ時間だ。魔獣や魔物がもっとも活発的に動く時間。
ま、俺ほど昼夜に影響されるヤツはいないだろうけど、な。

「師匠～。終わりましたよ、準備。…とは言っても特に持っていく物はありませんでしたけどね」

そういってハハッと笑うコウを横目で見つつ、俺は人間の侵攻軍の行方を見る。
予想通り、１０隊の騎士らしきヤツらが魔物に潰され、摩り下ろされ…魔獣に喰われてパニックに陥っていた。しかし、それは全ての中の８割ほどで…残りの２隊は、魔物と魔獣の山を越えて、なんとか先に進んできた。
これは……面白そうだ、とは思ったが…見つかれば面倒なことになるだろう。

「コウ、人間がここに攻めてきてる…。まぁ、どうせたどり着いたところで何もありゃしないが…俺達がここにいた痕跡を全て破壊する」

「確認ですか？それなら悔いはないですよ。僕はもっと強くならなきゃいけませんから」

俺が念のために聞いた（拒否しても破壊したけど）住居の破壊。それにもなんの躊躇いも無く答えたコウ。……さっさと壊すか。

「これが始まりだ。俺の二度目の人生がな……『滅悪劫火』」

俺が炎属性魔術、『滅悪劫火』を発動させると…俺達の住んでいたという証拠が跡形もなく灰になっていく…悔いはない。むしろ清々しい気分だ、これから旅立ちなのだから……。

「さ、出るか。世界を見て回る旅にでも、な」

「いいですね…僕はここ以外の世界を知りませんから、すごく楽しみです」

俺が人間達が入ってきたほうへ向かうと、後ろからコウが笑いながら追いかけてきた。

人間達に関(かか)わる必要はないが、ありがたいことにここの出口を示してくれた…割と使えるヤツらだ…。と内心考えていると、1隊がこっちに向かって走ってきているのが分かった。

とはいってもまだ遠いのだが…念のためということで俺とコウは隠れて様子見をすることにした。

「くそっ…姫様！姫様は無事っ……くっ」

「おい！生き残ってるヤツは何人いる！？」

「7人だ！…ッ！？くっ魔獣の大群だ！全員退避しろぉ！！」

割とパニックに陥ってるっぽい。

魔獣の大群って…たった10体ぽっちしかいねぇじゃん。あんなの

朝飯前だろ、と思ったが…そういえば俺達は異常なんだよなぁ、と思ったので考えるのはもうやめた。
無言で俺が人間達のやられているところを見ていると……

「師匠、助けにいきましょう」

……やっぱり言うと思ったが、ここで偽善のために俺達の存在を知らせる必要はないだろう。ということで却下。大人しくじっとしてろ。

「……いいですよ。師匠が行かないなら僕が行きます」

「やめろ。お前が行ったら普通に考えて異常だろうが、へたすりゃ魔獣扱いされんぞ」

「でも……やっぱりじっとなんてしてられませんよ！」

コウはそう言った瞬間飛び出していった。
取り残された俺はポツン……と寂しくコウを見守る。……助けにいかないのかって？無駄無駄、俺が行くまでもねぇ。コウが全滅させちまう。

「『シャイニング・レイ』！！」

コウが魔力を練り合わせ巨大な魔方陣を空に作り上げる。
ズドドドドドドドド！！という音を立てて、魔方陣より降り注ぐ光の矢は魔獣を1匹残らず死滅させた。人間のほうには被害がないのか？というとそういうわけでもない。
現に、人間達が乗っていた馬はズタズタに切り裂かれ死んでいたし、死んではいないようだが、普通に人間もダメージを負ったヤツがた

くさんいた。
「くそっ…新手か！？」とか「なんて強力な魔術なんだ！ここの魔獣はこんなものまで使えるのか！？」
とか叫んでいる人間達、だから行くなといったのに…。
その後、コウはもう一度巨大な魔方陣を作り上げ……。

「『シャイン・ヒーリング』！」

人間達の傷を全て癒していた。
アホだ。凄まじくアホらしい、あれは魔術の中でも広域治療魔術と俺が勝手に呼んでるモノで、通常の最上級魔術の3倍の魔力を使うのだ。
アイツの魔力は俺より少ないのだから、もっと気をつけるべきだと俺は思う。

（さっさとしろ。ヤツらがパニックに陥ってる間にさっさとここから出るぞ）

（分かりました。それじゃあ、僕は先に行ってますね。今なら師匠はすぐ追いつけるでしょうし）

コウからの返事を聞いて念話（テレパス）を切る。
その後、コウが走り去っていった方向へ向けて走り出す。後、2分あれば追いつくだろう。

なんだかんだで俺も少し楽しみだった。
黒髪じゃなくなったおかげで態度が変わると思ったからだ。しかし、右目と首に巻かれた包帯と、地面につきそうなくらい長い後ろ髪は、

どう考えても人目につくだろうが、俺がそれを知るよしは無かった。
そして…この長い白髪のせいで、これから少し面倒なことになるなんて…この時の俺は思ってもいなかった…。

異常な俺は人里へ行く（後書き）

これから主人公達が旅に出ます。
というより、やっとですね…。主人公に至っては中身おっさんですよ…w

誤字脱字ございましたら、お気軽にご報告ください

感想、評価、お気に入り、お待ちしております^^

幕間――――救われた姫（前書き）

今回は時期ヒロインの可能性のある人物視点ですかね？
少々少なめです。すいません

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ＾＾

幕間――救われた姫

状況は限りなく最悪だった。
私、リィナ・シュリントは心の中で舌打ちをした。
周りには２０体以上の魔獣の姿がある。もちろん、私達が呪われた大地（カーズド・ワールド）に進出したからこその結果だ。
なぜこうなったのか…それは、国から追い出されたからだ。
私は恨んだ。この地に追い出した貴族達を……。

私は端的に言えば、今年１４歳になる国の第一王女だった。王族というのは、他の国民達とは違った名前を持っている。なんでも古代の文字を利用しているんだとか、よく分からなかったけど、他の使用人達とは違って、王族だけがつけてもらえる名前だということだけを教えてもらった。
私は、よく知らなかったので、特に政治のことなどには関与していないし、そういうのは全て両親がやっていたのだが…つい先日…両親が暗殺された。犯人は分かっていた。隣国の王、略奪王――リメイト・ガナンだ。略奪王という呼び名は、欲しいモノを全て奪って手に入れるその強欲さと乱暴さから来ているらしい。
そして略奪王（ガナン）が次に欲しがったのが、シュリント国の王女……つまり私だったのだ。

普段は愚かで高慢でうるさい貴族のくせに、ガナン国に勝てないと判断したらしく、私は切り捨てられた。
ガナン国付近の元集落であった場所に放置されたのだ。
ついてきてくれたのは、私の近衛騎士団１０隊だけだった。それでも１人よりは全然心強くて、私は泣きながら感謝したのを覚えている。
しかし、道もあまり分からないのにこんなところで放置されてしまったせいで、私達は道に迷ってしまった。そして、うろついた結果たどり着いたのが呪われた大地だった。
引き返そうと思った。そのあまりの魔力の濃度――――瘴気――――によって気持ちが悪くなってきたからだ。しかし、引き返そうと思ったのが遅すぎた。
後ろにはすでに３０体以上の魔獣の群れがあり、目の前には見たことの無い土人形（ゴーレム）のような魔物が立ちふさがっていた。

私達は必死に逃げた。
いや、私を逃すために１０隊はあった部隊の８隊を使って私を逃がしてくれたのだ。
その後も１隊が犠牲になって最後には、私と１隊しか残っていなかった。

「くそっ…姫様！姫様は無事っ……くっ」

私の安否を確認しようとした騎士が、目の前で血まみれになって倒れてしまった。

「おい！生き残ってるヤツは何人いる！？」

「７人だ！…ッ！？くっ魔獣の大群だ！全員退避しろぉ！！」

魔獣が大量に押し寄せてくる。
もうダメだ…そう思った。でも、神は私を見捨てなかった。
「『シャイニング・レイ』！！」
そんな叫び声が聞こえたかと思ったら、黒く淀んだ空に巨大な魔法陣が描かれた。
神々しい光を発しながら描かれていく細かく複雑な魔法陣を見て…
「……すごい」
気がつけば呟いていた。
他の騎士達も、その光景を唖然とした表情のまま見上げていた。
しかし、次の瞬間…
ズドドドドド”ド”ド”ド”ド”ド”ド”ド”ド”！！！！！
という凄まじい轟音を立てて、光の雨が降り注いできた。
その光の雨は、周囲にいた魔物や魔獣を軽がるく葬り去り……。
「ぎゃぁ！！」
「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「目が！目が痛ぇよぉ！！」
「……――――――――――――え？」
私達にも降り注いでいたのだ。
運よく私には当たらなかったようだが、他の騎士達は違ったようで

痛みで転げまわっていた。
即死するような攻撃はなかったようだが…私は、裏切られたと思った。
神はやはり私を見捨てたのだと……。
しかし、そうではなかった。

「『シャイン・ヒーリング』！」

もう一度叫び声が聞こえて、先ほどのモノよりもさらに巨大な魔法陣が空に描かれた。
その魔法陣はキュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ――――――――――――という音を立てて、淡く暖かい光が降り注いできた。さっきの暴力的な光ではなく、そう正(まさ)にそれは癒しの光だった。

「あ、れ？痛みが…痛みが無くな、った……？」

「すげぇ！脚がくっついた！！」

「目が…目が見えるぞぉ！！」

ウオォォォォォォォォォォと騎士達が盛り上がっていた。
しかし、私は喜んでいる暇はなかった。これだけ強力な魔術が発動してということは、魔術(それ)を行使した人間がどこかにいるということだ。
会うだけで良かった。会って礼をしたいだけだった。だから周りを見渡す。
しかし、誰もいなくて……あ、

「白髪……？」

もう遠くてよく分からない上に、瘴気によってフラフラになった私の目でも…その姿をちゃんととらえることが出来た。すでに人知を超えた速さで駆けて行ってしまったが、私は見た。
白髪の髪、体と同じくらいまである長い髪の少女を……。

「……待ってなさい。絶対に見つけてやるわ」

私は密かに決意を固めた。白という髪の色を持っている人間なんて、そんなにいないはずだ。少なくとも私は初めて見た。探せばすぐに見つかるはず…ガナン国のヤツらが来る前に会いたかった。
相変わらず、騎士達は神の慈悲深さに感謝を――っ！とか言っていたが、私はそれどころじゃなかった。単純なことだった。ただ単純に感謝がしたかった。…それと少しの好奇心…。なぜこんなところにいたのか。なぜ白い髪をしているのか。…私達を助けてくれたのは、あの娘なのか。そうなんだとしたら、なぜ助けてくれたのか…？ただそれを知りたいと、そう思っただけだ。
絶望していた道に一筋の光が見えた気がした。

「みんな！聞いて！これからガナン国に入るんだけど…白髪の少女を探して！分かった！？」

そう大声で問いかけた私に、護衛の騎士団はわけが分からない、といったように眉を寄せたが、全員が「ハイッ！」と大きな声で返事をしてくれた。
私は、それに自然と微笑みで返していた。

なんとかなる。そう思い、魔獣も魔物もいなくなった道を進み始めた…。

幕間―――救われた姫（後書き）

……正直この話はどうしようか迷ったんですけど、とりあえず書いてしまったので投稿しました。
この話が回収されるのは…いつの話なんだろう…。

誤字脱字ございましたら、お気軽にご報告を

感想、評価、お気に入り、心よりお待ちしております＾＾

異常な俺は拉致られる（前書き）

なんだかよく分からない物語になってきたような……？

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ＾＾

異常な俺は拉致られる

あれからすぐコウに追いついた俺は、コウの隣を並走していた。
とはいっても、夜の場合俺のほうが全然早いわけで…今はスキップしている。

「……相変わらず夜は滅茶苦茶ですね。師匠」

と苦笑いしながら言って来たコウ。
……あまりにも遅すぎるので襟首を掴み全力ダッシュ！

「え、……ちょっ！？」

有無を言わさず全力ダッシュ。音速？そんなもん軽く超えてる。
音速の壁（ソニックブーム）によって体が傷つかない理由は、俺の体の周囲に風の魔術を纏っているからだ。もちろんコウの体もな。…ま、正直に言えば俺の場合無くてもいいんだが…廃棄物が増えるからな。主に手とか足とか腕とか脚とか……。

「あぶっ！……ぅおおぉぉぼｂｂｂｂｂｂｂｂｂッッッ！！？」

さっきから聞こえる雑音も無視。
しかし、暇だな…。暇だから今のうちに俺のことでも整理しとくか。
俺が蘇って———正確には『俺』と出会って———から、俺の体は

色々とおかしくなった。
まず不死身、これはいいだろう。そして身体強化や魔力の多さも……。
しかし、未だ残り2つの贈り物(ギフト)がなんだかが分からない。まぁ、困らないし。大丈夫だろう
次は魔術のことだった。まず第一に使うことの出来なかった系統魔術を使うことが出来るようになった。俺の属性は『土』と『風』と『無』だった。
土とは言っても、使えるのは『錬金』だけなのだが……錬金だけで充分な気がする。
そして風は、今みたいに風を体に纏ったり…後は普通に風を飛ばして攻撃することも可能だ。
最後に無は、特別な属性だ。正確には、系統魔術にも入っていない魔術だ。例を挙げれば、解呪(ディ・スペル)とかな…。無属性の魔術はたくさんある。特殊すぎて系統魔術に分類出来なかった魔術を無属性魔術というのだ。俺が最初に使った『影』なんかも無属性だな。他に『空間』や『治療』などもそうだ。
……っと整理してたら国っぽいのが見えてきたな。
急ブレーキ「へぶっ!?」……。

「……夜明けが近い」

「……何黄昏てるんですか。いきなり走らないでくださいよ!死ぬかと思いましたよ!?だいたい全然夜が明ける兆しがないですよ!」

大声でわめいてくるコウはもちろんスルーだ。
しかし、夜明け前に国(ここ)に入っておかないとまずいのだ。まぁ、アイツの言うとおり辺りは真っ暗なんだが……。

「よし、不法侵入するぞ」

「……捕まりますよ？」

「見つかったら見つけたヤツを殺せ」

「イヤですよ！」

とまぁ、コントをした後ひょいっと城壁を飛び越える。
コウもため息をつきながら飛び越えてくる。

「結局お前も飛び越えてくんのな」

「僕は常識に疎いですからね。師匠についていかないと危ないんですよ」

「心配ねぇよ。俺よりお前のが常識持ってるから」

「……何が心配ないんでしょうか」

コウは肩をぐったりと落とし、疲れたようにため息を吐いた。

「それよりも…お前、魔力危ないだろ」

「え！？」

「……まさか隠してるつもりだったのか？お前みたいな貧弱に広域治療使わせたら魔力切れになることなんて目に見えてたんだよ」

「う”っ！」

図星をつかれた、といったように――――実際に図星だったのだが――後ずさるコウ。
その姿をジト目で見る俺。

「さっさと宿とって寝ろ。お前には昼の時に、役に立ってもらわないといけねぇんだ」

「……分かりました」

コウがそう言ったのを聞き、俺は宿屋を探す。
しばらく歩くと、宿屋はすぐに見つかった。中に入ってみると特段変わったところもないし、むしろ綺麗なほうだと思った。（実は野宿しかしてこなかった2人の感覚がおかしかったのだが）

「ふわぁぁぁ…いらっしゃいませ～、こんな時間に何の用でしょう？」

中に入ると、中年のおばちゃんが眠そうに目を擦りながらやってきた。

「宿を取りたいんだが」

「もう店は閉めたはずなんですけどぉ～？」

ちょっと怒り気味の顔で俺達を見るおばちゃん。

「そうなのか、旅をしてきたんでね。常識には疎いんだ、悪いことをした。また来ることにする」

俺は単純に悪いことをしたなぁ…と思い、店を出て行こうとする。

「あ、ちょっと待ってくださいよ。いや…まぁ、部屋は空いてるしいいですよ。別に」

出て行こうとした俺達をおばちゃんが呼び止めた。

「そうか、ありがたい。それで料金は？」

「今は眠いですし。後払いで、それでは…これが鍵なので、おやすみなさい」

そう言って、鍵を渡しておばちゃんは奥に入っていってしまった。
ちょっと無用心すぎないか…？と思いつつ俺達は部屋のある2階に上がっていった。

部屋でコウを寝かせてから、俺は外に出た。
これからのことで色々と問題がある。そして、その中で一番の問題は…金だ。
現に、一文無しの状態で今宿に泊まってしまっている。
この10年間で金銭の価値が変わっていないことはすでに確認済みだからそういうトラブルはないだろう。
しかし、今現在金がないということは非常に困ったことになる。
なので、夜(いま)のうちに稼いでおかないといけないのだ。
……それに、気になる所もある。
この国はイヤな感じがする。この国中にあるこの臭いは、まさに血の臭いだ。

とりあえず、『裏』というのは手っ取り早く金を稼ぐ一番の方法だ。
ということで俺は血の臭いが濃い路地裏を歩いていた。

「おいおい、こんな時間になんでガキが歩いてやがんだ？」

後ろから野太い声が聞こえた。
俺が後ろを振り返ってみると、筋肉ムキムキないかにもチンピラみたいな顔したヤツらが3人いた。
俺は冷静にソイツらを観察し、解析、分析をしていく…。

「……チッ！無視（シカト）かよ。全く、ここらへんのクソガキ共は全員奴隷商に売りさばいてやったはずなんだがなぁ…まだ残ってたってことか」

チンピラの喚きを一応聞いているが、俺は観察に集中する。脳内プログラム―――と俺が呼んでるモノ―――が起動し、
【目標（ターゲット）3人。武器、胸元に隠し持ったナイフ。力強さ…そこそこ。顔…チンピラ。観察完了、目標が攻撃を仕掛けた場合、攻撃を開始する】

体が全自動で迎撃の準備を開始する…はずだ。

「ハッ！全無視かよ。それともビビっちまって声も出ねぇってか？お前ら、コイツでまた金稼ぎでもしようぜ」

「そりゃいいな！」

「そしたら娼館でもいこうぜ！」

盛り上がってるなぁ…。と他人事のようにチンピラを眺める俺。
……あれ？目の前が真っ暗だ。
気がつけば捕まってた。ズタ袋でも被せられたらしい。
あまりにボ～ッとしすぎてたか…。いや、さっきフラグを立てたからかなぁ…。
……まぁ、いいや。気にしない

「コイツ、本当に無抵抗で捕まったな」

「あぁ、全くやってる俺達が言えたことじゃないけどよぉ…ついてねぇよな」

本当だ。
ついてないと同情するなら解放しろ……いや、脱出は自分で出来るから、同情するなら金寄こせ。
ゆらりゆらりとゆられ旅。さてと、奴隷商とやらを巻き上げて金を得るとしましょうかね。うん、俺って天才だな。

ということで俺は目的地につくまで、ズタ袋の中でゆられ旅を楽しんでいた。

異常な俺は拉致られる（後書き）

多分大丈夫のはず…。

誤字脱字ございましたら、どうぞ気軽にご報告よろしくお願いします。

感想、評価、お気に入り、お待ちしております＾＾

異常な俺は奴隷商店へ連れて行かれる（前書き）

言い忘れてましたが、ストックが前回の話で尽きました…。
ということでこれからの更新はちょっとだけ時間がかかる可能性があります。
少々待ってくれるとうれしいです。

駄文ですが暇つぶしにどうぞ＾＾

異常な俺は奴隷商店へ連れて行かれる

ズタ袋の中で色々とこれからのことを考えていると、急に動きが止まった。
チンピラ共が奴隷商人とやらと話してるみたいだった。
そんで急にズタ袋を逆さまにされたかと思いきや、首輪をはめられて、足枷と手枷もつけられ、そのまま狭い牢に放り込まれた。
なんだかなつかしい感じがする。いや、実際に体感的には１５年ぶり、体的には２５年ぶりなのだからなつかしいのだが、そういえば４年間こんなとこに入ってたんだよなぁ。と謎の感動に襲われていたら……。

「君、新入りかな？」

誰かがそう言った。
誰に言ったのか分からないので無視。多分俺だけど

「ちょっと君だよ、君！」

そういって肩を叩いてきた同室の誰かさん。
仕方ないのでそちらを見ると、なんともまぁ美少女がいた。年はコウと同じくらいか…？栗色のセミロング程の髪と藍色の瞳が…まぁ、なんとも人形のように似合っている

……なぜ俺が女と同室なのか分からないが…。
フードを深く被っていたから女と間違えられたのか？……まぁいいか。

「……なんだ」

「なんだ、じゃないよ。さっきから呼びかけてるのに！もう……」

頬をプクーと膨らませて怒り出す美少女。
俺はそれを半目で見ながら、彼女の首にも首輪があることを見た。
もともと完全なる夜行性になってしまった俺は、闇こそが昼のように見えるのだ。まぁ、昼は眩しすぎて外があまり見えないのだが…
そもそも外に出たくもない。

「新入りかどうかなんて、ここに入ってきた時点で分かることだろ」

フードがとれた状態でそう言ってやると、今度はびっくりした顔で、少女はこう言った。

「え……？君って、男の子…！？」

……。ハァ…。
だからこんな髪の毛イヤなんだ。フードからもはみ出している灰色に近い白の髪の毛。その長さは立っている時で地面につきそうなくらいだ。つまり今は完全に床についてしまって、散らばっている。
そんな長さだから間違えられやすい……と思っていたが、やっぱり間違えられたみたいだ…。

「……男だ。……ところで、呼びづらいから名前を聞いてもいいか？」

俺がそう聞くと、

「え？あぁ、うん。私は児里（こざと）　恵理香（えりか）っていうんだ。君は？」

と言って、俺の名前を聞き返してきた。

「影月（かげつき）　朧（おぼろ）だ。」

俺はそれに短く答えた。

それから、俺と恵理香は…無駄に下らない話をして、恵理香はクスクスと笑っていた。俺は、相変わらず表情が表には出なかったが……。

しばらく経ったそんな中、恵理香が急に真面目な顔をして

「ねぇ、君…おぼろんはここから逃げたいって思う？」

と聞いてきた。おぼろんというのはもちろん俺のことだ。なぜこうなったのかはよく覚えてない。

もともと逃げる…というか、ここの奴隷商人から金を巻き上げるために来たわけなんだが…。

俺が沈黙していると、恵理香はさらに話を続けた。

「私はずっとここから出たいと思ってた。とはいってもまだここに来て１ヶ月しか経ってないんだけどね。それでも…今この瞬間でさえ、私のお父さんとお母さんは…私を探しているかもしれない。そう考えると…胸が痛いの」

「……そうか」

そう相槌を打った俺に、恵理香は言った。

「私は…今日脱出しようと思ってたの。でも、もし失敗すれば殺される。だからね、今日はありがとう。最後かもしれない時に楽しませてもらえたから……ねぇ、おぼろんにだって心配してくれる両親がいるんでしょ？」

「いねぇ。俺の両親なんざ、とっくに死んだ。……いや、生きてたとしても……」

俺の手で殺してやる。と、そう俺は心の中で呟いた。

恵理香は俺が途中で言葉を止めたことに首をかしげて……

「としても？としても…何かするの？」

と聞いてきたが、俺はそれを無視して…そろそろか、と呟く。

恵理香が「え？」と言ってきたが、無視。邪魔くさい首輪に俺は手をかけて――――――――

「ちょ！ダメ！その首輪は、無理に外そうとすると――――――――――――――――――――っ！」

ドォォンッ！！――――――――――――……。ビチャビチャ！

暗い部屋に、小さな爆発音と、鮮血が飛び散る音が響く。

「きゃぁ！」

軽く爆発した。軽く、とは言っても首から上は木っ端微塵に吹っ飛んだわけで……

生暖かい真っ赤な液体が恵理香の顔にかかるのも当然で……

「い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

という恵理香の叫び声が響き、「なんだ？何があった！？」っていう奴隷商人の声が聞こえるのは当然のことなわけだが……。

「お前…コイツに言わなかったのか！？首輪のこと…」

「い、言いました。でも、そのまま外そうとしちゃって……」

「くっ…この役立たずが！」

奴隷商人が恵理香を蹴り上げようとしたその足を…俺が受け止める。

「……は？」

「……え？」

「勝手に殺すなよ。ま、ちょうど会いたかったヤツにも会えたし、結果オーライってヤツか。夜明けが近いんだ。さっさと終わらせてもらうぜ？」

首から上が蘇生するまで、少し時間がかかったが、残念甘い。ただいま復活。まぁ、犠牲は首と顔の右半分を覆っていた包帯だな。首の包帯がとれたせいで、ズタズタに切り裂かれた痕が見えてしまっている…。フードは脱いでて良かったと思う。

「ひっ……ま、魔眼！？」

「なっ！？」

奴隷商人が見ているものは、傷だらけの俺の首では無かった。奴隷商人の叫びに恵理香までが驚愕する。
まぁ、それはそうだろう。魔眼持ちは災厄の存在だ。世界を滅ぼすとも言われているんだもんな、俺にとっちゃ関係ないけど

「な、なんで…お前拘束具は……」

「こんなもん簡単に壊れる」

そう言って、砕けた手足の枷を奴隷商人の足元に投げ捨てる。

「……化物め」

「そうだな。分かってるさ……。そういえば、聞きたいことがたくさんあるんだ。もちろん…答えてくれるよな？」

ニヤリと笑いながらそう言ってやると、奴隷商人はコクコクとすごい速さで肯(うなず)いた。
とりあえず聞きたいこともたくさんあったし。
金も欲しかったし…。
そしてこの首輪も欲しくなった。
あぁ、多分今の俺は心底楽しそうな顔をしてんだろうなぁ、と思いながら、俺は奴隷商人に近づく。
その後、奴隷商店で悲鳴が上がったのは言うまでも無い。

「ふぅ……あらかた聞きたいことも終わったし。そろそろ帰るか」
間違えた。力加減を間違えて商人を殺しちまったみたいだ。…まぁいいか
地面にズタボロで死んでいる奴隷商人を見ながら、額の汗（嘘）を拭うふりをして、上りそうな太陽を恨ましげに見つめる。
すごい額の金が手に入ったし、この奴隷商店にいる奴隷達全員の君主権も得ることが出来た。
首輪欲しかったし、ラッキーなどと考えていると……

「おぼろん……」

後ろから蚊の鳴き声のような声が聞こえた。
俺が振り向くと、恵理香が俺の袖を掴んでいた。未だに包帯が無いため、首の傷痕はそのままの状態だ。恵理香はそれを見て、顔を青褪(あざ)めさせながらも俺に聞いてくる。

「人を殺す事って……こんなに簡単に出来ることなの？」

恵理香がポツリと呟いたその質問に、俺はすぐに言葉を返すことが出来なかった。
なぜなら、人殺しなど…これが初めてだからだ。気がつけば死んでいた。遊びのつもりだった。そんな言い訳をするつもりもない。俺はコイツを殺したのだ。
だが、後悔もしてないし、反省をするつもりもない。邪魔をするヤツはなんであろうと殺す。ただそれだけのことだ。何も感じないし、何とも思わない。

「簡単さ。人は魔物や魔獣よりも脆いからな。簡単に死んじまう…」

そう、俺が守ることの出来なかった。奈央のように……。

「……俺が殺したいから殺した。それだけだ。この世界は弱肉強食だからな、強いヤツに弱いヤツが殺されるのは当たり前のことだろ」

そろそろ、本当に夜明け（タイム・オーバー）だ。ここにはまた明日…いや、今日の夜に行くとしよう。

「あっ……」

勇気を振り絞って何かを言おうとした恵理香を無視するように、俺は宿に全力疾走した。

奴隷商店には、呆然とした少女がポツーンと立っているだけだった。

異常な俺は奴隷商店へ連れて行かれる（後書き）

主人公、なんと初の人殺しでこの動揺の無さ。
自分で書いてびっくりでした。
まぁ、自分はすでに死んでいるので、死なんて大したこと無いって思ってるんでしょう。そう思いたいです（｜＿｜；）

誤字脱字ございましたら、どうぞ気軽にご報告よろしくお願いします。
感想、評価、お気に入り、お待ちしております＾＾

異常な俺は魔眼少女と出会う（前書き）

今日、部活のライブにて…歌詞を忘れるという大惨事を引き起こしてしまったｏｒｚ
ちなみに作者はボーカルですｗ
まぁ、そんなことはどうでもいいんですけどね。

それでは駄文ですが、暇つぶしにどうぞ

異常な俺は魔眼少女と出会う

太陽が昇る前に、なんとか俺は宿屋につくことが出来た。
中で寝てるコウを起こさないように静かに扉を開けると

「おはようございます。師匠」

ベッドに座ってニコリと笑いながらこっちを見ているコウがいた。

「……早いな」

「僕が早いんじゃなくて師匠が遅すぎるんですよ」

俺が「寝てないだろお前」といった皮肉を言うと、そんなことには全く気付いてないとでも言うように普通に返してきやがった。……はぁ

「休めたのか？」

「えぇ、魔力は回復しました。ご心配かけてすいません」

「……危険になるのは俺のほうなんだが」

「そうですね、すいません」

「……」

悪いだなんて少しも思ってないように笑いながら言葉だけの謝罪をしてくるコウ。

……っと、太陽が出てきたみたいだ。…体から力とやる気が抜け、何もする気が起きなくなった。

今日色々と奴隷商人から聞いてきたことを伝えたかったんだが…やめだ。ダルい

「……寝る」

「師匠。今日はやることがたくさんあるんでしょう？寝させませんよ」

「……」

もう死んだな。むしろ死にたい。死なないけど…。

俺は無言コウを睨みつけ、コウも俺の目から全く逸らそうとはしなかった。

俺は面倒になってきたので、そこらにあるたくさんのフード付の服を着、無言で宿屋の外に出る。俺全然休んでないな…死なないし、別に大丈夫だろうけどさ。

コウが宿屋のおばちゃんに「今日の夜にはお金を払いますので」とニコリと笑った結果、おばちゃんがその笑顔にやられて、惚(ほう)けてしまったので、その隙に俺とコウは外に出る。

なんともあくどいやり方だが、引っかかる向こうが悪いのだ。

「……ギルド」

俺はコウにポツリと呟く、やっぱり顔の筋肉が上手く動いてくれない。
そのせいでやっぱり昼は話をすることが出来ないみたいだ。

「冒険者ギルドですか、いいですね。師匠」

だが、察しの良い――というよりは長年ずっと俺と一緒に居たからなのだが――コウは、その一言でほとんどの真意を汲み取ってくれる。
しかし、この国？についた後すぐに寝たはずのコイツがなぜ冒険者ギルドを知っているのかを疑問に思ったが、途中で思考を放棄した。
前々からコイツには驚かされることが多いのだ、今更この程度で驚くと思うな。

それからしばらく冒険者ギルドまで歩いていった俺達、周りからは好奇の目で見られている。
まぁ、それはそうだろう。コウは文句なしの美少年だし、俺は何枚も服を重ね着している上、フードで顔を隠してるし、その下には包帯を巻いてるし…何より、フードからはみ出した長い白髪が人目を集めているんだろう。

「人気者ですね。師匠」

「……」

お前もだろ。と心の中で呟き、俺は無言で――傍(はた)から見たら無視したように――歩き出す俺。
それを微苦笑しながら追いかけてくるコウ。なんとも周りからすれば奇妙な2人組みだった…と思う。
しばらく歩いていると、道の真ん中に人だかりが出来ていた。

周りに集まっているヤツらの会話を聞いていると、

「また例のアレか……」

「いい加減にしろよ」

という呆れの混ざったような声と…

「いいぞ！もっとやれ」

「殺しちまえ！そんな化物！」

という何かを罵倒したような声だった。

化物、俺はその言葉に反応した。つまりここには化物がいる、ということだからだ。

もしかすれば…黒髪の人間かもしれない、そんなあるはずのない期待を胸に、コウに無言で俺の意図を知らせる。コウは薄く微笑むと、すぐに真顔になり

「通してください。邪魔です、一体何事ですか？」

と言い放った。……全然俺の意図が伝わってないんだけど…？なんでそうなんだよ、アホか。なんて事を考えていた俺には目も暮れず、さらに言い放つ

「これ以上うるさく喚くのでしたら…全員叩き斬りますよ？と、私の師匠が腹を立てています」

そう言って、俺の肩をグッと掴むと体の前に引き寄せてきた。

その瞬間、コウに向けられていた視線が一斉に俺のほうに向く…。

なんでだよ。おいコウ、なんでお前はドヤ顔をしてんだ。ふざけんな、この状況をどうしてくれんだ。今の俺じゃコイツらに勝つなんて無理だぞ？歩くので精一杯なんだから……。

「おいコラ、ガキ共…そう大人を怒らせちゃあいけねぇぞ？だいたいなテメェら、旅人ごっこはもっと向こうのほうでやれ、こっちのほうは来ちゃいけねぇって母ちゃんに言われなかったのか？」

コウの言葉に青筋を立てていた男達のうちの1人が俺に向かってそう言ってきた。
俺は言い返すこともなく、無言で突っ立っている。別に余裕ぶってるわけではない。立っているだけで体力をガリガリと削られているだけだ。

「えぇ、言われていませんね。こちらのほうには一体何があるのでしょうか？」

コウがさっきの挑発したような態度を一変させ、丁寧に言葉を重ねると…目の前の男はちょっと機嫌がよくなったらしく、

「バカ野郎。この辺っ言ったら『魔眼』持ちの化物娘に決まってんだろうが」

ピクリ、俺の頬が引き攣ったのが自分でも分かった。
『魔眼』…俺の右目にも宿っている強大な魔力の塊が、なんらかの理由で眼球と融合することによって出来る強力な力……。その力故に、『破滅を導く』とか『化物』などの名称をつけられる悲劇と偶然の産物…。そして、俺の今の戦力でもある。
俺の頬が引き攣ったのを見逃さなかったのだろう。コウが

「そうなんですか？知りませんでしたね…魔眼ですか、ちょっと見てみたいのですが？」

と言った。すると男が

「バカ言うな！あんな呪われた目を見たら呪われちまうぞ！？」

と言ったが、コウは冷静に言う。

「そういう貴方も見たから魔眼だと分かるのでは？」

「ぐっ……」

コウの反論によって男が黙り込んだ。コウが人波を裂いて、俺も通れるようにしてくれる。

さっきのはジョークだったのかもしれない。やっぱりコイツは出来るヤツだ。

周りの男達はだいたいのヤツらが、何も言わずに俺達を凝視していた。中には、「呪われちまえ、クソガキ共」とか言っていたヤツがいたが、完璧に無視。だいたい俺は子供じゃないのだから怒るはずもない

コウが人波を裂いた先には、１２歳程の人形のように整った顔を持った美少女がその場に倒れ伏せていた。

綺麗だったはずであろう流れるような桃色の髪は無残にも土で汚れ、服もボロボロになっている。

そして顔にも殴られた痕のようなモノや、擦り傷のようなモノもある。目は閉じてしまって見ることが出来ない…という状況だった。

まぁ、俺には視える。コウやこの男達には今は見えないだろが、俺の『魔眼』は応用が物凄く利くからな。全く持って問題はなかった。

それ以前に、魔眼同士はその特殊な波動のようなモノを出しているからだろうか。ハッキリと分かる。

しばらく魔眼による魔力を少しだけ送り込んでみると、倒れていた桃色髪の少女がピクリと動き、俺のほうを見上げた。

その目は…黒色をしていた。その瞬間、俺の魔眼に痺れが走る。

そして、俺は少女の持つ魔眼の力を『把握』した。これは俺の魔眼、『操作』と同じ効果だ。少し強力な…いわば『操作』の本物（オリジナル）のようなモノだ。しかもこの娘はこの力を使いこなすことが出来ていない。そのくせに俺でさえ痺れるほどの濃厚な魔力を持っているため、恐らくは目を見た人間を無意識に従えてしまったのだろう。その結果、このような扱いを受けるようになった…ということか。

「ぁ…見ちゃ、ダメっ……」

俺の目を見つめていた桃色髪の少女が焦ったように視線を下にズラそうとする。

しかし、俺は少女の顔を抑えつけて下を向かないようにする。

それでも眼球だけで下を向こうとする少女の目さえも抑えて無理やりその目を覗き込む。

やはり体が痺れる。しかし、所詮はその程度だ。俺の魔眼のほうが…完全に最凶なのだから。

ずっと覗き込んでいると、少女の頬は赤くなり、目から涙が滲んでくる。「……ぁ」とか「……ぅ」とか声を出そうとしているが、何を言えばいいのか分からない…というふうに口をパクパクさせて、目を泳がせようとクリクリと眼球を動かそうとするが、俺がその動きさえも止める。

「師匠。それ以上は犯罪ですよ？」

コウの言葉で、俺は我に返った。
ついつい魔眼持ちということで俺は昼間だというのに興奮してしまったみたいだ。反省、反省…。
しかし反省すると同時に、昼間でもまだ感情が残っているのに安心した。

「……？」

やっぱり俺がコイツ欲しいなぁ…と少女を見ていると、やっとのことで解放された少女が訳が分からないといったように首を傾げる。

「師匠。その子にも生活があるんですから、拉致したりしたらダメですよ？」

「……ちっ」

「……拉、致？」

意味が分からないといったように再び首を傾げる少女を無視して、俺達は会話にならない会話を続ける。周りの男達は俺がやったことに息を呑み、その後の俺達の会話を聞いてポカーンとしていたが、やがて我に返ったように…

「テメェら…まさかそこの化物の仲間か。……ハッ！通りで不気味なヤツらだと思ったぜ」

とニヤリと不敵に笑いながら言ってきた。
その男の言葉が引き金だったのだろう、周りのヤツらも…コイツらは危険だ。早く追い出せ、という情報が回ったみたいだった。それは瞬く間に伝染していき……

「消えろ！化物共！！」

とそこらに落ちている石を俺に投げつけてきた男がいた。
もちろん俺はその石に反応することが出来ない。しかし、その石は俺に当たることはない。
なぜなら…俺に当たる直前で、コウがその石を掴んだからだ。
そして……最初に言い放った時の数十倍の威圧感を出し、コウは呟く。

「……ふ、ふふ……貴方たち、今、一体何をしたかお分かりですか？」

空気が凍った。いや、凍るなんてモンじゃない。空気が死んだ、または消えた。
そんなレベルだ。目の前の少女もガクガクブルブルと震えちまってるじゃねぇか……はぁ。

「……コウ」

「止めないでください師匠。僕は師匠に石なんて物を投げたあの男を――――」

「コウ」

「…っ！！……分かりました、すいません」

コウが謝った瞬間、死んだ空気が蘇った。
男達は顔を青褪めさせながら、「くそっ！消えちまえ化物共が！！」と捨てゼリフを吐いてバラバラと散っていった。

その瞬間、俺達のいる空間だけが切り取られたように無人になる。
コウは未だ煮えきれない思いを抱えていたようだが、俺の命令には逆らわない。やっぱりお前は出来た人間だ、昼間の俺にはやっぱり最適な人間だな。

「……」

俺が無言でコウを見ると、コウはバツの悪そうな顔をした後、すぐに苦笑して…そして少女に近寄っていった。

「大丈夫ですか？貴、女……！？」

コウが呼びかけた瞬間、動かなくなる。おそらく魔眼を喰らったんだろう。…まぁ、この少女の魔力量は夜の俺の４分の３くらいあるからな…。
その瞬間に、コウの顔を無理やり俺のほうにし、魔眼、『無効』を発動。
ハッとした顔になり、コウは少女の目を見ないように、もう一度話しかけた。

「っ……ごめん、なさい。私なんかがいるから……ごめんなさい、ごめんなさい」

コウが話しかけると、少女はなぜか泣き出してしまった。その姿を見て、コウがオロオロとし始め、俺を見る。どうやらヘルプを求めているらしい。
面倒だが、そもそもは俺がコイツを欲しいのだ。つまり面倒でもやる価値がある。

「……ぐすっ……ふぇ…？んっ……」

俺は無言のまま、泣き出してしまった少女に近づき、その頭を撫でる。
急に頭を撫でられた少女は困惑するように俺を見るが、その目は決して俺を捉えていない。
きっとまだ魔眼の効果で人を操ってしまうのが怖いのだろう。現に魔力が少なく――――とは言っても普通の人間の１０倍はあるが――――魔眼を持っていないコウは一瞬でやられてしまったのだから…。
俺はそんな少女を抱き寄せ、無言で頭を撫で続ける。かける言葉が見つからなかった…いや、少ない言葉しか話すことの出来ない今の俺では足りないのだ。この娘に告げるべき言葉が…。
だからこそ無言で撫で続ける。少女は最初こそ困惑してあたふたとしていたが、次第に大人しくなってしまった。あまりにも大人しいので、どうしたんだ？と見てみると、

「すぅ……すぅ……」

といった感じで寝ていた。なんで？と思いつつ、放置することも出来ないし…かと言ってコイツがどこにいたのかも知らないし……そもそもこの娘を運べるほど、今の俺には筋肉がない。

「……コウ」

「はい、大丈夫です」

コウは簡単に返事をすると、俺に寄りかかっている少女を抱き上げる。
しかし体に負担をかけないように、おんぶの形に変更する。気がつけば周りの人間が1人もいなくなっていた。魔眼持ち、というだけでこれなのだ。もし俺が不死者だ、なんてことがバレたらエラいこ

とになる。…ということで隠しておかなければなさそうだ。
いずれバレそうな気もするが…なんとかなるだろう…。とりあえずは宿に戻ってこの娘を部屋に寝かせた後、さっさと冒険者ギルドに行かないと…。

「……帰る」

「はい、分かりました」

宿屋のおばちゃんまで、この娘の事を知ってるのだろうか？と思ったので、途中でこの娘に俺の着ている服を一着羽織らせておくことにした。
今日はコウだけに任せておくか。俺は奴隷商店にもいかないといけないしな…。と思いつつ宿屋に向かった。

異常な俺は魔眼少女と出会う（後書き）

昼間はあまり話すことの出来ない主人公…なんともどかしいことか…。

それのせいで、昼と夜のキャラがすごく変わってしまう…w

まぁ、それも一興ですかなw

誤字脱字ございましたら、どうぞ気軽にご報告よろしくお願いします。

感想、評価、お気に入り、お待ちしております^^

異常な俺は冒険者ギルドで登録する（前書き）

ライトノベルを読んでいると、どうしても自分の文章に自信が持てなくなってしまうｏｒｚ
まぁ言っても仕方ないことは分かってるんですけどね＾＾；

駄文ですが、暇つぶしにどうぞ＾＾

異常な俺は冒険者ギルドで登録する

「それでは、冒険者ギルドに向かいましょうか」

コウが満面の笑顔でそう言った。なぜこんなにご機嫌なのかは知らない。

今、俺達は宿屋のベッドにあの娘を寝かせてきたところだ。宿屋のおばちゃんは、気付かなかったのか。それとも知らないのか。分からんかったが、どっちにせよ何も言われることはなかった。

しかしまぁ…桃色の髪を持った珍しい少女は、魔眼なんてものを所持しているせいで、その美しさというものが伝わらないらしい。アホみたいだ、全く。

ま、それは置いといてもだ。俺達が出掛けている間に起きて喚かれるのも困るので、念のために俺の魔術で寝かせておいた。無属性『幻夢』にて、幸せな夢の世界に旅立っていることだろう。…それのせいで俺の魔力が尽きかけたのは内緒だ…。

「……」

俺は無言でコウに背を向け歩き出す。

コウは俺のことを良く知っているので、何も言わずについてくる。

一応戦闘技術を叩き込んだ俺———もちろん夜の時の俺———に感謝の念を持ってるみたいだし、これからもついてきてくれるそうなので、しばらくは安心だ。…流石に俺でも昼間1人でブラブラして

るのは危ないからな。

俺達が歩いていても、周りの好奇な視線はあったが、あの男達のような化物を見るような、侮蔑するような視線で見ていた人間(ヤツ)は特にいなかった。まだ噂が広がってないんだろう。広がってたところでどうってことはないが…。

そうしてるうちに冒険者ギルドについたみたいだ。文字の読み書きなんてモンが必要だっていうんだが…文字の読み書きなんて何年ぶりだか…まぁ、俺は『絶対記憶能力』を持ってるし、忘れるわけなんてないんだけど…。……え？初耳だって？そりゃそうだろ、今初めて言ったんだし…むしろ知ってたら怖いわ。

俺達が冒険者ギルドに入ると、中にいた人間(ヤツら)達が一斉にこっちを睨みつけてきた。

しかし、優雅にそれを無視する俺達。コウに至っては、ギルド内にいる数少ない女性に甘い笑顔を振り撒いている。……別にうらやましくねぇよ。３５にもなって妹と奈央以外に女とまともに会話したことねぇなんてそんな恥ずかしいこと言えねぇよ…。あ、恵理香を忘れてた。…たった3人だ。

…っと、俺がそんなことを考えているうちに受付についたみたいだ。

「冒険者ギルドへようこそ！ご用件はなんでしょうか？」

受付では１０代後半といった感じの受付嬢が元気に声を張り上げてきた。

俺はそれを半眼で見ながら、コウにやりとりを全て任せ、辺りを見回す。

酒場のようになっていたギルド内には、冒険者であろうおっさん達がむさ苦しく集合していた。

先ほどから俺とコウ…いや、俺をジロジロ見ている。

俺はそれを無視しつつ、クエストボードと呼ばれる依頼を貼る掲示

板を見上げる。
身長の低い俺では、見上げる形になってしまうのだ。仕方のないことだ…。

「師匠！早くこっちに来てください！」

ジーっとクエストボードに貼られた依頼を記憶していると、登録をしていたコウから呼び出しがきた。恐らくは俺の登録の出番だろう。
……ん？なぜか周りがザワめいていた。しかも怪しい俺ではなく、コウを見て…まぁいいや。俺も登録するだけだし…と思っていたが、予想以上に壁は大きかったようだ。

「あ、え～と…ごめんね、ギルドには１５歳にならないと登録出来ないのよ」

と受付嬢が俺に向かって言ってきたからだ。

「……コウ」

「……師匠。分かりました、頑張ってみますよ。……えーとですね」

コウが俺の代わりに説明…もとい説得を開始した。
これぱっかりは頑張れ、としか言えない…。

「おやおや、今日は珍しい。こんな可愛らしいお嬢さんがいるとは」

ガランガランと音を立てて冒険者ギルドに入ってきたのは、コウには劣るがなかなかの美青年だった。年は２０いくかいかないか程だろう。

……無視だ。お嬢さんは俺ではない、例えこの男が見ている先には受付嬢を除いて女が1人もいないとしても、その男が俺をガン見していたとしても……。

「あ、佐々木さん！いつもお疲れ様です」

「いえいえ、それよりもクエスト完了したんだけど…いいかな？」

「すいません。今この子達の相手をしているので…隣に行って貰えませんでしょうか？」

「そうなんだ。何か問題があったとか？」

「いえ、この人がどうしてもそこの女の子をギルドに登録させたいって聞かなくて……」

おぉ……。なんか話がこじれてきたぞ。

佐々木とか言うのが、入ってきて…今はコウと話してるし。

……仕方ない。魔眼の出番か

「……俺は35」

「え？」

俺の呟きに、受付嬢は反応しこちらを見た。

思わず頬が緩んだ。受付嬢が俺の魔眼を凝視する…かける魔眼は…

『信仰』、『操作』の逆の位置に存在する魔眼の力だ。使う魔力は極少量でいい。それで充分効果のある魔眼なのだから

『操作』が嘘を騙り操るのに対し、『信仰』の魔眼は、真実を語り完全に信じ込ませるのだ。

受付嬢は『信仰』により俺の言葉を完全に信じ込み……

「それでは登録を開始します。手をこちらに……」

「ってあれ！？綾乃ちゃん！？登録しちゃっていいの！？その娘（こ）」

「申し訳ございません。この人はちゃんとした３５歳ですので…」

「何を言ってるんだい…って君が言ってたことは本当なのか！？」

「だからさっきから言ってるじゃないですか。師匠は男だし、僕の父親でもあるんですよ」

ふむ…とりあえずは大丈夫そうだ。

あの佐々木とかいうのも…バカで助かった。

その後、俺は色々と簡単な作業をこなし、渡された白色のツルツルとしたカード――――これが俗に言うギルドカードというヤツらしい――――に指先から一滴血を垂らし、その血が馴染み、色々と情報が登録されたことを確認し、一旦飯を食うために冒険者ギルドを後にした。

まぁ、出る前にコウが受付嬢――――確か綾乃とか言った――――にフラグを立て、なかなかの美青年――――もちろん佐々木のこと――――がそれに嫉妬していたのは…まぁいつものことだ。

俺が冒険者ギルドから出た瞬間、俺の腹がぐぅぅ～といった情けない音を出した。

「師匠。夕ご飯にしましょうか」

にっこりと微笑みながら、そう言ってきたコウを横目に見ながら、

俺は近くにあった芳ばしい匂いを放っていた宿屋の1階に転がり込んだ。

料理を適当に頼み、運ばれてくるまで暇だな…なんてことを考えていたが、ふとさっきの冒険者ギルドであった出来事を思い出した。なんでコイツ登録の時にあんな騒がれてたんだろ、ということだ。早速聞いてみよ

「……コウ……登録……騒ぎ」

「え？あ、えっとですね。僕の総合値がAで、いきなり冒険者ランクがAになったからじゃないでしょうか？」

……ランク？なんだそりゃ

俺のそんな表情を読み取ったのか、コウが言葉を続ける。

「冒険者ランクというのは、冒険者の登録時に決まる冒険者の強さの証のようなモノですよ。ランクの順位はG＜F＜E＜D＜C＜B＜A＜S＜SS＜Xといったようにありましてですね。ギルドカードの色でランクの見分けがつけられるんですよ、例えば僕のはAランクなので銀色です。Gならば白、Fならば紫、Eならば黄、Dならば緑、Cならば青、Bならば赤、Sならば金、SSならば白金、Xならば黒…といった感じですね。元から存在するそのランクを、依頼（クエスト）を受けてどんどん上げていく。ランクが上がれば、依頼（クエスト）は難しくなりますが、その分の報酬は跳ね上がりますし。その他にも色々と良い事があるみたいですよ」

「……把握」

つまり、このカードは自身の証明、自身の情報、自身の強さが全て

出てくるカードだってことか…。すごい高性能だな…恐ろしいわ。
……っと、そういえば俺のカードは何色なんだろ。と思い見てみると、白色…つまりはGランクだった。……今の俺なんだし、ランクGなのは分かってたけど…やっぱり悲しいなぁ。と思ったが、考えても仕方ないので考えるのをやめて、飯を食うのに集中した。
とりあえずは登録を終えたし、飯も食い終わった。後は夜に備えて寝るだけだ。

「……コウ」

「今日は僕だけですか…。分かりました。それではBランク辺りのものを受けてきます」

コウはそう言って冒険者ギルドに向かって行った。
さて、俺も宿に戻るとしよう。あの魔眼の娘が少し気になるからな。

俺はポケットに入っているギルドカードをグッと握り、宿屋に向かって歩き出す。
太陽がジリジリと俺の肌を焼いていく…嫌な日だった。

異常な俺は冒険者ギルドで登録する（後書き）

そういえば主人公達は金払ってないのに宿屋泊まりこんで飯食って……。

なんだか滅茶苦茶な気がするｏｒｚ

誤字脱字ございましたら、どうぞ気軽にご報告よろしくお願いします。

感想、評価、お気に入り、お待ちしております＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2806z/

永久の闇と朧月

2011年12月20日18時48分発行